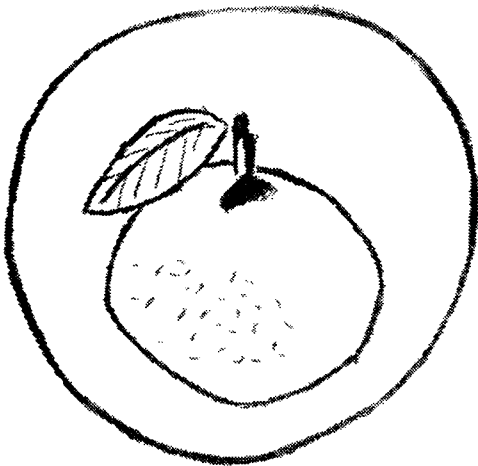


わいふ



26号



狭いアパート、六畳と何がしかの部屋で

母と子の二人が一日中顔をつき合わせていく

どうして

おおらかな子供の成長を期待し得ようか。

香里田地保育所づくりの記録

「たたいてひらいてむすんで」より

目次 一第二十六号一

二周年記念特集

二周年会合に出席して	森	かなえ	1
わいふ二周年記念に参加して	吉田	てる子	1
二周年記念座談会の報告	十日市	睦子	2
（二周年集会決算報告・バザー決算報告）			3
随想 ひのえうまについて	三	矢久子	4
私の好きな冬の京都	川	方百合子	5
座談会「ゆく女性について」	田	和明子	7
（金曜会の御案内）			11
俳句 三位	高	木米子	12
詩 位置	荒	木芳夫	12
おわりの日	松	本恵子	12
創作 白いズボン	草	川土岐子	14
猫	村	岡紘子	16
志摩の旅愁	重	川雄	17
従妹同志 (四)	山	口紘子	21
本の紹介 学年新聞「大地」	藤	本洋子	25
随想 「内眩はやりをどうみるか」について	三	矢久子	27

随想 「稻垣様に」	石井	よし子	28
ひろば 私の感想	金頭	操	30
おたより	金頭	操	36
もしもし欄 斉藤さんへ	吉田	てる子	38
へ家庭	金頭	操	39
タジャリーナ(スパゲッティ)			40
アンテナ			40
編集後記			40

二周年記念特集

二周年会合に出席して

森 かなえ

十一月二十八日 晩秋にほめづらしい、上天氣だった。仁川団地集会所で開かれた、「わいふ」オニ回会合に、神戸より出席したが、私の心は一寸さびしかった。去年の婦人会館での、初めての集りの時ほどのムードは盛り上がりなかった、又啓志さんのような男性がまじわらなかった、せいとも知れない、それとも又、私の身近なブル、プがみんな欠落されていたからかも知れない、60台が私一人40台が一人あとほみんな30台までの若い美しい方達、みんな20人あまりの集りでした。

十日市野子さんの進行係で「この頃のわいふ」少しむっかしくするといわれますが、今後のわいふのあり方にどんな問題をとり上げればよいか、又、テーマを決めて投稿し合うか、等のお話し合いがあつた。其後、バザーで買物をしたり交画さんの教の指導で巨のしく合唱したり又記念写真を、うっしたり、ますますの楽しい一日で、来年の会合を夢見ながらみんな別れをおしんでの散会でした。バザーで、ハネも賣いこんで、よくふかはあさんスタイルで重い荷物を両手にさげ、お世話してくださった方々に感謝しながら無事に帰ってきたが私はこう思う。このわいふ、誠にはあまりかたぐるしい事を書かず、身じかかことを書き合ふ。誠に、巨のしく、心の安らぎの場ともなつてほしい。わいふ創刊の特色を生かし、話し合う、チャンスの少

くわい私達が壁にして、放えられたり、放えたりの誑上隣組となり、向上もしながら、巨のしく、ほげまし合いの人生でありたい。そのためにも「わいふ」の発展を、みんなで育てよう。

おわり

わいふ 二周年記念に参加して

高槻市 吉田 てる子

十一月二十八日、電車の中で私は考へた。

家を出る時、「仁川団地まで行ってきます。」と意気こんで出てきたものの、始めて目的地をはずねるのと顔見知りがないので、全く自信が無く途中引き返そうかと迷いつつ、仁川まで来てしまつた。出会う人毎に「仁川団地ってどの道を。」と大きな川に沿って歩き回さい。「見えるでしょう。あれが団地ですよ。」とどうも有難う。して団地に足を入れたと巨ん、今度口集会所がわからない。「十号の番号をさがせば高木さん宅でもわかるだろうと、ウラウラ」と高い建物を見上げながら、「わいふ」の集会所は此の道をと矢印の道案内でもつけてくれ、はい、のにと心の中でつぶやきながら、四人目だったろうか集会所をたすねたらわざと引返して集会所の前まで案内して下さつた。小田さん有難う。「地獄くで佛にあつた林は」とはこの時の事をいうのであろう。目的地に着く事にあせてい反ので時計も見ずに来てしまつた。やがて自己紹介。

パンを取っていてもいろんば顔が目の前に浮かんで来るけれど

必も名前がわからぬ。私と同耳配位の要よしとさん、お嬢さんの頼を思ておられるらしい森かほさん、お二人だけ甘っさりと記憶によみだえつて来る。これからはこの林行事があつた場合、名札をつける林にすれば又覚えられるかもわからぬ。

いろんは意見を聞いて、同意、同意とうなずき役に終わったけれど、今日は本当に出席してよかつた。寂しい小さな事に目を白黒むいているよりも、若い皆さんの息吹を身近に聞き大いに視野を広める事が出来、意義ある日であつた事を嬉しく思う。

何かとお世話をして下さる皆さんに感謝の意を表すと共に、わいふと共にもっとく 発展努力したいと思う。

一周年記念座談会の報告

池田市 十日市 睦子

11月28日、心配していた空模様も雨が少し降いただけの晴天に恵まれ、一時間には高橋の吉田でる子さんの一番栗りを皮切りに、タクシーで神戸の奥よしえさんばかりつけてこられたいご成田、大阪からも荒々みましました。

昨年の一周年集会以來の頼みれや新しくお目にかゝる方々と20人近くあったことまで自己紹介に続いて座談会「一耳をふりかえて」をはじめました。

その時に出た声を、

「全体的に固苦しく難かしくなつて書きにくくなつたという声があつて居るが、その対策として編集部としてはテーマはどをあげたりしてみたいか。」

。「女の気持」的口ものを気軽に出版したい感じはあるけれど、森かほさんが書かれるようなものでも楽しみにしている。

。「ぬかみぞ教室」のようなものを書いて勉強したい人はそんなものを、又随想とか詩、近況などの得意の人はそれを、それだけの持前を書いたらいいのではいいか。

。自己紹介的日記の呼びかけを時々は編集している人がやつたら。

。近況欄などもつけて、会費を送つて来られた時にそれである手紙の近況をアンテナの林なものでなく、その人の言葉で一行でもよいからのせたら少しは固苦しい感じもふせげるのではいいかしら。

。一年に一度位は特集号でも出して、自己紹介、生活環境とかあるいはこんは本読みたいとかなんでも好きなことを例え一行でもよいから書いてもらう林な企画もしてみたら。

。頭の発達より心の発達の方が大切だと思ひますので誰れでも母き口こと書ける、それをみんなのけるといふ今までの方針でよいのちがうかと思ひます。

。ぬかみぞ教室について、これから勉強したい知りたいたいと思う向題など。又こんなやり方でもよいかどうか。

。どんな向題でも経験されたり体験されたり中から出て来たものは興味深い。

。稲垣さんなど、図書館で調べたり新聞の切抜きを作つたりで

自分自身いゝ勉強にやりましたと云われてました。
—その他ほんでも。

。今までの様な座談会がなくなつたのは淋しい、記名、無記名は別として。

。書いても反応がなかつたらちよつと物足りない。

。座談会やひろばのページをもつと増やしたらどうか。

。少し形式を変えてもこれまでの座談会の林は形に戻したほうがいいか。

。赤字になるならバザーを定期的に持てば。

。一年に一回の集会も会場を持ち廻りにしては、神戸でやったら大阪とみいう具合に。

。金座会の案内毎回出して欲しい。

。会員名選に年令とか子供佚の大きさなど書いてあつたら自分の

近くの人と友達にやれてよいと思ふのが。

。遠い人が旅行などされて来られる時(神戸へ)せひ来て欲しいといつても思つてます。

いといつても思つてます。

色々ど活発な意見がとび出し、あるいは脇線し参加者一同笑つ

たはびるほどと思つてりました。編集部もこれらの意見を今

号より早速取り入れる積りであります。尚この集会に参加出来

なかつた方もどしどし御意見お寄せ下さい。

それからバザーには140宛もの品物が集りありますがどうぞごさいました。

バザー 決算報告

バザー寄贈者名(順不同)

吉田てる子	下糸和子	斎藤由美子	山田昌子
浜岡千代子	荒木李恵子	田中理子	上田吟子
大田千帆	田和明子	田中美千子	藤森絹枝
斎藤るり子	高木由利子	八尋 伝子	草刈土岐子
小山やえ子	十日市隆子	藤木 洋子	上村穂子
鈴木芳子	津田和代	浅田八重子	奥 よしえ
北国千津子	松崎三子		

バザー収益金 13,400

皆様の御協力ありがとうございました。今後ともよろしくおねがい致します。

二周年集会決算報告

収入 支出

会費 2,100円 (21人分)	会場費 50円
その他 320 (残った菓子類の売上げ)	果物菓子 2,350
	宝ひん 20
<u>2,420円</u>	<u>2,420円</u>

差引 0

寄附 2,500.

森 かねえ 藤本千代子・森 絹枝
平田恵美子・印南千鶴子さんより
各々 500円

ひのえうまについて

滋賀県

三 矢 久 子

いよ／＼昭和四十年も終りをづげる月になりました。

むかえる昭和四十一年はどんな年でしょう……。

さてこの四十一年は早くからいろ／＼と世論にざわがれた年

ですが、私共女性にとりましても關係の深い年ではないよう

です……と云いますのは「ひのえうま」の年だからです。

六十年目に一度やってくる年だからです。私共の小さな子供

頃は「ひのえうま」は何だろう？と想ったものです。

でも大人たちの会話をきいたり、それとなく、いろいろの人

々からきき伝へにおぼえて、ほんやり下らも「ひのえうま」の

意味をおぼえなうなわけです。

昔の人はこの「ひのえうま」の迷信をすい分信じていたよう

です。そのためにこの年に生れあわせた女性結婚してもすぐ

離婚へひのえうまと云う理由で……とせられたり、又、生活に夢

がなぐなり自殺したり、いろ／＼悲劇の女性が沢山いたと云う

ことです。

この「ひのえうま」の年に生れた女性は「男を食い殺す」と

云いまして十二支のエトの中でも一番強いと信じられていま

し。

それで結婚の相手にこの年生れの女性は男性からきらわれて、

誰も相手にしてもらえなかつたと云うことです。でも最近テ

びで、この「ひのえうま」生れの方々に幸福な平和な生活を
している夫婦が幾組も紹介されて「ひのえうま」は迷信だと云う
ことをバクローしています。

「迷信は追放せよ」とこのごろは大衆に呼びかけています。「
わいふ」の若い仲間の方々に、みはさんは迷信をどう思いますか
？」

さて迷信にもいろいろありますが又この外に二よみの大安三
りんぼ、友引、神滅算あります。おめでたい結婚式は大安の日
に決められます。又かなしみのお葬式は二度重むるといけない
といひまして友引の日はさけられます。

これも迷信だらうと思われませんが、しかし、まだ「大安吉
日」だとか、「友引」だとかごだわる人々が案に多いように
思われます。人間の本心とは、やはり弱いものなのでしょう
か？……「その日は悪い日ですよ」と云われますと、やっはり止
めようかとまよつたりします。この外に手相を思ふ人、又姓名
判断をする人運勢を見る人、つまりエキ着といひますが予言
者です。こうゆう人のいうことを信じる人、信じない人、これ
は自由ですが氣にする人、又氣にしない人、いろ／＼だと思ひ
ます。この予言者に対して「わいふ」のみはさま方、どんなこ
とでも意見のある方、おぎかせ下さいませ……。

私の好きな冬の京都

神戸市 川方 百合

今日は大原の里を歩いてきました。

四乗大宮から乗った大原行きバスには、たった四人しか乗客が居らず、この調子ではきつと大原もすいていることだろうと安心していたのですが、結局三条、東阪でバスは落着きになり大原に付いておどろきました。山ま丘山の、そのま丘奥のこの大原の里は、名古屋から来た婦人会の団体や、東京からの修学旅行生で人があふれていました。

大原の里は美しい所です。こけむし巨石がき。草のはえ巨礫美ひかやぶきの農家の屋根には、紅葉してまっ赤になつたたのしつぽがしがみついてゐるのです。山の農家も一段高く石がっんにあり、その上に葉のはい柿の木がいつはいの実をつけて、玄關の前でデコと立っています。竹やぶの、すこし黄色くはりかひた太い幹には、柿の葉と見まがひそうながらすこりがつるをほり、すぐ前の谷川は気持ちいいせせらぎに湧いています。私は一人、木コ木コと山道を歩き始めました。私がバスに乗りかかっている間に歩いてた吉のせいで道はつるすべるので足に力がいります。すこし行くと、右側に水車が見えます。水車は生まれて以来、絵とみ歌とかではよく知っていました。が見るのが初めてです。何となく興奮してそれを見、さらに奥に進みました。きつと、春にたたらさるやのひかひ景色だらうと

と思ふ風景がはらう続き、みやけもの屋が三、四軒がたまつている所へ出ました。そこが、梶井門跡三十院の石垣です。私は事前に本を読んでこのあたりの華を少し調べておいたので、この奥の東迎院へ先に行こうとまっすく進みました。

三十院の石垣の所からはバツタリと人がと見え、すこし入ると静寂さのもの、右手の小川はすこし急に流れ、道の両側の木々は半分くらい紅葉しています。道には、黄色や赤いもみじが美しく散りしき、その上をさっきの雨の名残りがチロチロと流れて、古典的な平安朝の美しさです。一人でブツブツ、あめきれい、とか、すごいなアとか言いながら奥へ進むと、奥へ進むほど紅葉が美しいのです。右手の小さい石橋を渡った所に、層々とした建物が見えたので私は入ってみました。玄關には東迎院の略図がかかっています、台風のたけ拝観は出来ません。仏像のみ、この事務所では拝観出来ないので、御希望の方はお知らせ下さい。と書いてあったので、ごめん下さいと言ってみました。返事がありません。しかも大きく大きな声で再度叫んでみました。どうとうあきらめて、略図に従つてもう少し奥へ行ってみました。

左手のしげみはさまざま、ピンクと白の花がいっぱいに咲いています。そのしげみが切れ戸所に階段があり、登ると、パツと目の前がひらけ、何も無い四角の土地に、本当に雄大な屋根の線がシーンと胸の中に直撃してきささる感じ。本堂です。空気が澄み、正に堂々と、正にしんかんと、スツキリと存在しているのです。私はいささか威圧され感じ、しばらく見つめていました。

そこから少し山道をトロトロと登り下りすると、音無しの滝が優美に落ちてゐる所に出ます。あまり大きくなく、水も白糸

の着のようは細い筋を四、五本落しているだけですが、何とも
言えず女性的で美しい着です。その着のすこし下に、せきとめ
袴タムのようなのがあって、丁度着のようには水がおちているも
のですから、多くの人がそれにたまざれて白黒の着はなして、
……と、思つて憚るようです。

三千院はすごい人で、往生極楽院への往復の巨額のゲタの番
も頓着を待たなければならぬほど……、さすがに、本堂か
ら極楽院に向つて見る庭はすばらしく、木々木々冠じりましたが
、とにかく人、人、人で、心から見るという感じにはどうして
も、ほれませんでした。

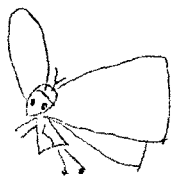
三千院を出てすこし北へ行くと勝林院というのがあつて、拜
観したかつたのですが、人がいひかつたのでやめました。その
前から細い道が西にびていたのをどにかそちらへ行つてみ
ました。本堂のどなかば農村という感じで、きつと春にはっく
しやれんげがいっぱいなのでしよう。たぶん、と私が思った通
り、その道はバスの停留所の方へ流れており、そこから人の列
に従つて、寂光院に向いました。畑の中の細いあぜ道に寂光院
へ行く人の列が続いているのですから、驚ろきます。冷たい風
に、唇、鼻の頭をまつ赤にしてシユンシユン鼻をすすりながら
の行列です。

寂光院はいいお寺です。建礼門院が、亡くなるまで二十数年
住まれた所たところですが、いかにもそれらしく落ちっ
いた巨匠すまいと簡素な持ち味です。本堂の御本尊もお迦尊杯
で、安徳幼帝の御冥福を祈られた女院のお心がわかる感じがい
します。それにしては、この山深い土地までよく俊白河法皇は

来られたことと想いました。今こそ市内から一時向たら
でバスで来られますが、当時は道も充分でなかつたよ
うし、どんなふうに行幸したのさしよう。平家物語、まは説
んたことではないのですが、一度読んでみたいと思つて
います。

最近の京都なんてほとんどこも紹介しつくされ、俗化の一
歩手前まできています。でも私などは、この中から古いものを
見つけなければなりません。ですから私は、いつも京都へ行く
と、たとえは三千院とか清水とか銀閣院とか、有名な所では
死に美しいもの、すばらしいとされているものを思、感じよう
と努力します。でも、反いて多い、人に気が散つて化から満
足は出来ません。地獄に口のつていないけと赤いていたら
かつた、というふうな所、たとえは遷城の地蔵院、鈴虫院(華
蔵寺)、大原の未迎院、一乗寺あたりの古寺などに強く心をひ
かれます。自分自身で静寂のまつた中に入つて、じかに体中
で産の美しさ、寺の尸史にふれることが出来るからです。

日曜日には絶対さけることにしています。行楽、シーズンも、
冬の京都が大好きです。特に、雪の嵯峨野など、最高です。



一 座談会

「働く女性について」

神戸市 田和明子

○今日は、先月号の特集テーマだった「働く女性に就いて」だとおしやべりをしてみたいと思います。現在アルバイトとして、ピアノ教授、英語教授などをなさっている方も、中にはいらつしやいます。皆さん、今後、自分の仕事を持ちたいと思つていらつしやるのかどうか、そうですね、手をあげてみて載せましょうか。

○では、まず何故働き度いのか、それから話し合つて参りましょう。

○私、働くという事が生々しい何となく嫌な感じがして居るつもりです。ですから、加減はお小遣い稼ぎの趣味で甘んじて長続きしないものでないかという気がします。

○そうですね。このひどい物價値上りでは、とても暮し難くなつてきた近頃ですから、生活必需品、止むべく働く人が多くなつて夫はのほ理解出来ず、でも働き度いと願う私達の心の中には、消費生活ばかりしている—と云つても家事労働が毎日の衣、食、住、育児、健康管理などにとつて何よりも大切な仕事だという事は、はっきり知つて居るつもりですが、それに対するやりきれなさの極むものがあるのではないか、と、そんな風に思います。

○私も、家事が嫌いだということではありません。唯、それに伴

住しているという事だ、つい抵抗を感じます。

家庭に居るのが退屈的で、職場に出るのが進歩的だというつもりは無いのですが、家の仕事は、その後にはつてという気が持たされては可いし、それにはつきりとした目的や目標がないから如何に充実感が残つてはくれぬのです。

○仕事をしている時の緊張感、それの消えた後の満足感や本心に素晴らしい、家庭労働には無いものですね、仕事を一応後、子供に對しても、つよい母になつてしまつて居る私です。

○もつと突っ込んで考えてみれば、法律ではいくら男女同权が保証されていても、経済的支援付けが無ければ、本当の平等にはなれないと云えるのでしようね。それからの、新しい女性の生き方として、もつと真剣に考えてみるのもよい事ではないのでしようか？

○私は、そんな深い考へ等はとにかくしても、唯ほ—と毎日行つてしまふのが借しく、何だか、頭の中がぼけて来つてしまふ極端なせりの極むものがあるのですよ。そんな時、本を讀んでみたりはして居ますが、それはどうしても頭の中心の聖賢にしか過ぎないのですものね。

○「わいふ」に入つていらつしやる方は、少くとも何れの形で社会との連がりを持ちたいと思つていらつしやるのでは無いでしようか。

○私はつい先日まで、全体的な理由で、小さな会社に勤めていました。唯それが重なつてくるという事で、何かが心に穿られるやうなものでありませんでした。

○私は、働く、ということのみならずそれを求めなくても、わいふ

の杯などをやって行くので、充分よいのでははいかと思つて
います。

○さうですね、その場が例え労働でも、奉仕でも又サークルで
もよいと思う、新しいイブキの入つてくる何かが欲しい、何
か本當なのか、何時だつてはつきりと見付めて行ける目を失
わないうで行きたいという思いが、近頃の主婦の中に増えつ
つて来た杖に感じるのですけれど……時代が流れようか
。それに何の社会保障もない、いざとなつたら生活保護去にし
か頼れないこの社会を無意識に不安に感じて居るものと云ふ
かもしれませんね。

○私の娘時代は、唯、結婚のみを目的として、過ぎして来てし
まつた杖の所がありました。今こうして仕事を持ち度いと真
面目に考えてみて、何の特技をも持とうとしてゐたか、
大切なあれ等の日々の事を、心の底から残念な反まらなく思
うのです。そしてさう云い乍らも、その大切な時間ほとんど
人行つてしまつて居るのですから、何時か又惜しまなくとも
よい杖は、ちやんとして行かなくてはと思ひます。

○天中、子供中心だけで暮らしてきてしまつたなら、それ等は
何時の日かきつと迷つて行つてしまつても可い。これ何自
中心にして行き度いという意味とは全然違つたのですけれど、
わかつて載けますでしょうか？

○よくわかります。
○それにあつさりど云つてみて、この頃の主婦が休暇が出来な
きたという事も指摘できますね、さうあつしやる皆さんの必
のお家もとても清潔を整いちやんとこんな子や子を育て、

いらつしやるのですから……確に、その時間を、よろめきテレビ
でふさいたり、井戸端会議を終らせたり教育漫判ママ個人主
義になつてしまふのは、勿体ない杖は気持ちもしますね。

○反けて女の人が仕事をもち、家庭と両立させて行くのは困難
難仕事は余り多いですね。

○では今度は、女性の仕事の内容について話を進めて行つてみ
ましよう。

○仕事に意義を見出して行き度いと皆さんおっしゃいますので
そんな目標にきつちりと当てなまつた、生き甲斐のある女性
の仕事つて、さうさう私達の周囲に之ろが、つてはいないでし
よう……これ口男性の仕事にも云ふ事さしようが……。

○それはさうですね。仕事には単純なものや専門的のものど、
二種類あると思ひますが、どちらでも、労働の喜二びを感
じる事さえ出来ればいいのではないさようか。

○私にも至験があります、労働がもし一まらぬいものでも、
初いていれば、人向の一端に觸れられるさようか？……それ
によつて視野が広がるのは、やはり嬉しい事です。

○私も結婚前に勤めていた事があります。はじめは、ゆく意欲に
燃え、張り切つて出て行きましたもの、その期待も夢も、
現実の前にはおしくどすつかり冷や切つてしまいました。

○さうにあつたのは決して労働の喜二び等を甘くなく、厳しい男
女差別で、その差別の前には切く意欲をなくしてしまつて居る
多くの女性ど、その女性の回転を早からんと、つまり早く結
婚出来になつてくれる杯に、それを待つて居る会社側の態
度でした。

○ どうしてそんな差別が出来たのでしようか

○ 私自身の中にあって、女性口結婚したら家庭に入れっとか、母親は家庭にこもり、夫や子供のために生きるべきだ、ひかえ目ニ三女の美徳なりっという様なモラルが、まだく存在しているのを感じます。

○ 历史的などでもないのでしょうか、封建的などでもないのでしょうか、そんな私達の慣習や伝統で私達自身の仕事の内容を貪りして来てしまった事も見逃せぬでしょうか。

○ 私も家庭に生きろのが、女性の左衛門的な性格の故に信じさせられて来ました。

男女の差別は自然的（肉体的、生理的）なものであるという前に、それがあんなに、社会的な置かれ方から来たものかも知れないと、考えて見る必要もあるのではないのでしょうか。

○ いくら新しい女性として生き林とか、ゆこうとか考えてみた所で、現場にこんな多くの圧迫があり、又その上に家事と育児との二重負担を押し付けられていたら、それがとても（重過ぎて、つい他人主義な片隅の幸福に満足仕林と、家庭にじっとしていなくなってしまうのではないのでしょうか。

○ 先日テレビの討論会で、教員の高校生がみんな、母親ほどに忙しかく家に何時もいてくれて、自分達によりよい状態を与えて欲しいと云うのです。子供の手が離れれば仕事をもち度いと思っていた私でしたから、一寸シヨツクでした。その時の司会者の深瀬子さんが、母親も人間であり、社会の一員である事を忘れてはいけませんしやっていますね。

○ それは所有本能でしょう。自分の召し使いは誰れだつて欲しいものです。私達だって父親のいらぬ母か何かは自分のいいなりにだつてくれ、は気持ちがいいでしよう？でも三の息子も、奥さんをもらい新しい召し使いが出来た時、母親が自分の仕事なり、趣味なりに喜二びを見出してしてくれる方が、母と肩の荷が軽くなるのではないのでしょうか。

○ でも女は、家庭労働のみに向いているのだというモラルに何時迄も足を引っ張られてる限り、私達の現場進出は、何時迄も制約が多くなるでしょうか。今の状態では、家庭を犠牲にして迄、外に出る行く事は、余りにも困難な事がありますね。だからついそんなに意義のある仕事があるかしらと引つ込み思案になつてきます。これでは、自立した一人の人間として認められる事は出来なかりませぬ。

○ 二んは男女差別の習わしを、積極的利用しているのは、安く女性を雇える資本家という事になるのでしょうか。すると男性から見ても女性、差別は大いにマイナスという事になると思えますけれどもね。

○ 保育所などのこと

○ どうでしょう、保育所なども、自分の可愛い、大切な子供が自分の側に一日中いるよりも、もし整った保育所や学校保育があつて、そこでよりよい団体生活をする方が、ずっとこの子のプラスにひるといふのだらしたら、私達だって、もっどもっと勇気が出てくるでしように……そして実際に育児はかりに専念していると、テストママ、や、進学ママになる可能性が多く子供はニ三才を過ぎるとゲル、プで喜ぶ方がずつと

と主人の専任と云われていますが、その他の家事労働も社会化され、ほんの口々にしてよい。

○ 国に対しては欲しい事がいっぱいですがね、よくわかりませんが、オリンピックや万国博の事でも、こんなものに使うお金があるのなら、私達に直接関係のある設備の資金に廻して欲しい気がします。何だか放棄しすぎて、家族に満足は食べ物と与えられないお父さんが、大義名分をかりげてお客接待にやたらと派手にお金を使うのを、黙ってみている林は心遣いです。

○ 内取のこと

○ とにかく二人は取では、内取が流るのわからない気がしますがね、

○ 日本中で何種類も内取があるといいますが、随分多くの人があるのをしている訳です。でもそれ等は、でたらめに安い工賃のものが大多数なんだそうですよ、一時向付いて二十円、一日働いて百円というのはよい方だそうですから。中小企業の低くすぎる賃金層の工場労働者より、同じ仕事でも内取の方がずっと安い工賃だそうで、それが労働者を脅かしている有様なんだそうです。

○ 雇い主は、もっと安い働き手を雇付けられる事が出来る訳ですものね、貧乏人はお互に足を引っ張り合っている様は有様です。ね、これも喜ぶのは唯、資本家のみという事になるのでしょうか、こうして一寸考えてみても矛盾がいっぱいありますね。

○ では最後にまとめとして

○ 種々話し合ってみましたが、私達が一心に職業意識を持つようとしてみても、現在の日本のあり方は、余りにも無理が多過ぎる林に思います。

○ でもこうしてあきらめたり家事労働は価値があると、唯方として満足している天でなく私達女性の社会的、経済的地位を正しく考えてみる必要がありはしないでしょうか

○ アメリカでは生活水準が高いので、教会や羊校の役員、社会奉仕、パートタイムほど主婦が出て行くのが多いそうですよ。

○ そうしてみると、日本の貧しさは問題になりそうなんです。私達は今迄食生活の故、家計の為に女性労働を安売ったり、又、食しすぎるから、家事労働にせられて職場を止めなきやならなかつたとも云えます。それだけでも残念に思えます。

○ それに日本の中に古いモラルがのさばらず今迄無償だった家事労働が社会化されて、男女共に気持ちよく働く事が出来れば生活はぐんと楽になり、みんなのびくと前向きな姿勢を歩いて行けるでしょうに……

○ 今の所はせめて、自分の子供にせよ強い民主的な所を持たせる林にっつめ、その本能を訓練する位の仕事しておきたく思っています。理由はともあれ、少しずつ働く女性が増加して行きつつある現状でしょう？、何時か婦人全体の社会的地位も高めて行ってくれるでしょう。今は過渡期と云えない事もありませんものね。

○ とにかく何やがやと抵抗の有り過ぎる、今の女性の職業です

が、長からと云って決して後向きなほどならず、お互に現実をはつきりつかめる澄んだ主婦でありましょうね。これからまだ長い私たちが、女の一生々の本当の幸せの為めにも、よく考えて歩いて行きましょう。

これでは、まだ（話し足りない、掘り下げ足りない事が多い林が気がしますが、それは又次の機会にゆすり度いと思えます。では今日はどうも御苦勞林でございました。

——出席者 草刈、斎藤由、斎藤ル、鈴木、田和、十日市
英岡
(アイウエオ順)

金旺会の御案内

一月七日(金) PM一時～四時

於：草刈 宅 (仁川団地十三一三〇三)

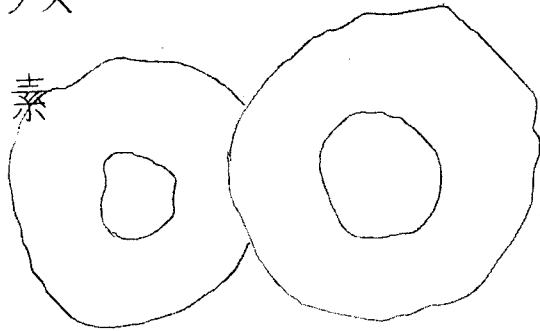
▽山崎 謙 著 「正しい思かたど考えかた」

オ三課のオ三講とオ四講を草刈さんの担当で勉強します。

昭和の

ドーナツ・ミックス

肉まんの素



製造元

神戸市生田区東川崎町1の52

神港製粉株式会社

俳句三題

宝塚市 高木 米子

手拭を髪に時雨るゝ露天風呂

墨絵めく沖へ熊野の渡鳥

三日四日の旅にもみちて熊野路や

詩

位置

宝塚市 荒木 芳夫

あなたはいつも

私の前を歩いていきます

あなたはいかなる時でも

ふりむきません

あなたは私が正早く追うと

一定の距離をたもつように

逃げていきます。

あなたは後を追う私をぞ存知のようです。

詩

大阪市 松本 恵子

おわりの日

かんなの花が咲いている

クレパスのオレンジ色で

夏の終りを咲いている

ものうげに

その葉は広く

節厚く

茎は太く

わたしはこの花が

嫌いだ

あかい煉瓦の煙突が

喜れてゆく日の中に

その煙突の下に

鉛筆のバアサンは

水盤に水を張る

ねずみ色の指先で

盥をじやりにやりに

切りにみぞみながら

くぼごう もってくれ

又、私には白く見えるが

何か書きこんである手帖をお持ちのようです

あなたは私には見えない糸でも私の手に結んで
つけているようです。

そして

小太のようにあやふり歩かせます。

悲しみは

主人の顔を見ることほど

戻おいをかきながらひかれ行く

小太の鼻に

化粧した小太のあたまのようにな

らぎ出ています。

はよ 暮れんとくれ

バアサン

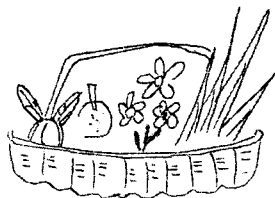
かんはは 早よ死ぬ花せい

そげ花

生けてとぎやんなる？

服を片すけて

わたしは出かける。



創作

白いズボン

空塚市 草川土岐子

こんな事があるなんて——私には考えられない事だ。空も森も池の水もまはらば人通りしかない道もそして歩いていく人向迄も潔白されてしまつた。林な真夏の晝下りには、私は汗もかずに歩いていく。私の体を活動しているのは、機械的に動いている足とブツアツツびやいている口元だ。中身のインテリ女性、しかも教員である私——背すじを幾度目かの悪感がけしつた。

今日は本当に暑い。夏休みに入つても最初は、数ヶ月向片づけてなかつた。家の中の整理で忙しかつた。それも一段落してやつと平凡で一寸退屈な主婦の生活のリズムに乗り出した。昨日今日である。会社に勤めている夫を送り出したあと、朝食の片づけを終えると、掃除、洗濯それに買物が済めば、あとは自由に出来る自分の時間だ。早く家事を終え、ゆっくり手足をのびして本を讀もうと考へながら買物かげをさげて家を出た。しかし今日の市場は、いつもの難然とした活舞とはうらはらは、ほろりつばいシャッターの中で沈黙していた。勤めている時、市場の休日とちがはずなかつた。毎日はその呼ばれる昨日の遠く、私に、私の生活も色分けされ、独得の味を持つていた。休暇に入つて半月もた、ないうちに、もう生活は日旺以外は色を失い味を失い特色をなくしてしまつていく。

「主婦って楽しいものだなあ——」

汗をふきく遠いマーケットへ行くべく歩きはじめた。

「奥さん、マーケットまで行きはるんやったらどうぞ。」

近所の奥さんがほんやりしている私をみつめて自動車を止めにくれた。

「やあ、のせてくれる？ たすかるわ。」

私は心をはね返してまぶしいアイボリーピンクリ車にかけよつた。車の中も暑かつた。風は窓から吹き込んで来るが、それをも全部から汗がふき出た。車をマーケット前に止めてもろって冷房のきいた店内に入つた時は飛石にほつとした。せいせい涼感を染しもうと私はのろりくらりと店の中を歩いた。夕食用の品物以外は別に高いお茶あてもなく、何かほり出しものがあれば位いの飲料で、入口に置かれたお茶を待たずに店内を歩いた。暑さで食欲をなくした目には特に欲しいものもみつからず、二三の品物を手にしただけが勤定金の列に並んだ。すぐ後にはまた学生がヤツと学校を卒業した位の青年がインスツートラーメンを天山入れたお茶をさけていた。自炊なのだろうか。友誼をすますと吹きつける林な太陽の真ん中に押し出された。せつかく汗がひいたお茶からと私は、四方から私を包む林は熱帯の中をそろり／＼と歩くことになった。町の家並みが大変な所まで日傘を手にしたままさしてはいない自分に気がすき立ち止つた。その時白いズボンの替の古い青耳がゆつくりと私を追いぬき、数歩行つてから一寸をめらう林に立ち止つたが、決心した林に今来た道を、今度は足早やに戻つていった。

寂しく探しているお茶のかんと思ひながら、何気なく自分の買物かごは目を落した私は、全身の血がすいと引いてしまつた林が

気がして立ちすくんだ。私の外にはお金を払ってはいない紅葉の巨木が入っている。確かに私の手で簡物が窓に入れた事を感じ出した。私は自分の抱いている恐怖から逃げる様に、思わず家へ向って足早々に歩きはじめた。自分のしている事をどうと返たいが歩がねはならなかった。「どうしよう、どうしよう」。

「今戻って、お金を払ってくれはい、んやわ」

そう云ってみて、はじめて戻らねはならぬことには気付いた。私はあらためてマーケットの前の前にならぬでお金を出した。その時、茫程私を追い越して行った青年、戻って行った青年が、はじめの勘定の時私の後にならぬでいた青年ではなかった。もうかど考えた。もしそうなら、もし彼が気付いていて私の事を返の人に告げたら、もしマーケットから出てから交番の前でも通り、青年がおまわりさんに告げたら——私は両青年はびった。手先がふるえておつりのお金もゆたつゆたつ、さいふをしめる向もどかしその店をどび出した。『万引き』。ぼつと自分には無意識であったその言葉を、あの青年によって、皆の前で思い知らされていたとしたら……。

「ねえ、私、今日、万引きしてしもてん、」

主人が帰って来ると私はわざと大声で彼に云わすにはいられた。自分で自分を告発する為めに。

夏休みがすんで、私は又教師と云う仕事に戻った。学校では先生と云われることに抵抗を感じない中年のベテラン教師になりつつあった。しかし買物のことなどは考えながら家へ帰る途や、ぶらぶら（百貨店をおもいでいる時「先生」と呼びかけられ

ると、今でも入ったとする。今までから、私は学校外では生徒と一緒に歩きたくなかった。その気持ちはこの夏休み以後よけいに強くなった。ふと、自分の意識外に木ツクリ肉いた空間にいる自分——そんな自分自身に気付く度に、何が今妙な事をしてないかを探らうかと考えてみずにはいられなくなった。

殊暑のきびしいある土曜日、文化祭の為に本を借して欲しいと云う生徒と並んで学校を出た。二人で並んで歩きながら私達は秋の文化祭のことを話していた。秋には色々な行事がある。雑巾が多くなり疲れるが色々な行事の為に生徒と一緒にバタ／＼働いていると学生時代に遠くは林は気にはなる。器で何かを作り出す時の、あの若々しい興奮状態は心良いものだ。

家の近くまで来た時、私の視野の端をチラリと白いスポンが横切った。私は反射的に立ち上り、恐ろしいものを見る様に、目をゆつくり動かしてその白いスポンの後姿を眺めた。白スポンの青年らしい後姿は歩調もみださず遠ざかって行った。『白スポン』なんて誰れでも持っている。私は自分に云いさかせながら、あわてて数歩走っている生徒の後を追った。キラ／＼輝いている午後の中を、その時、不思議なざわめきを伴った風が吹きぬけていった。

「風立ちぬ」。

私は声に出して云った。

「生きめやもって先生、どう云う意味？」

生徒は尋ねた。

「私、いつも秋の気配を感じるの。暑い日さしの中にかくれている秋の匂いさ」。

猫

宝塚市 村岡 蕨子

宍子は猫を何十匹となく殺してきた。別に野良猫押縛員でもなんでもない。一匹のめす猫が生子猫を、殺して殺して互いのである。

宍子は犬して猫好きでもなかった。しかしさして嫌いと思つたこともない。宍子は、反子伏火ひろつて来たる猫を、子伏がひろつて来たる猫という理由だけで、十数匹向かい懸けてきたのである。

猫は無責任である。ひろつて来て一耳反った反むいうちに宍子のおもわくほどにはおかまいなく、腹をふくらませた。

子伏もまた無責任である。めす猫からころがり出した子猫を、有頂天になつて愛撫し、いつくしんぼのは、最初の二、三耳だけであつた。後腹からつきつきに出て来たる子猫を、まだ目の開かないうちに、箱に入れては、海に流し、土の中に埋めて殺すのは、皆宍子の仕事になつていたのである。

宍子に何十匹となく猫殺しをさせる原因になつたのめす猫をひろつてきた長男口、高枚を出るとすぐに、疾い借家を嫌つて、地方都市に働きに出て、めつたによりつかなくなつて来た。異常ほど猫好きの末娘は、猫好き故に決して自分で子猫の仕末をしようとはしなかつた。そして子猫を殺して来た宍子を悲難がましく見つめては

「あ、あ、この家が自分の家だつたら、うん、自分家だ

なくても、せめて独立した型の家だつたら、子猫が自分で独立できるまで飼つ事だできるのに」。

と、嘆息していた。

宍子はさうした娘の嘆きも聞かぬふりをして、せつせと働き続けたいのである。

食つたために、自分一人で大きくなつたような口ぶりの、生意氣盛りの娘を一人前に育てるために。

めす猫は年をとつても相変わらず、子を生んだ。そのたびに家主である弟夫婦との向にトラブルがおこり、心ならずも子猫を殺し、そして娘との間に毒が深まつていった。

やがて末娘も、宍子の手元から去つていった。残されたのは宍子と、そしてめす猫だけである。

母老いた宍子とめす猫。

ほんとは宍子の前に、黙念と眠るめす猫をみて、初めて宍子は、猫が嫌いで、くで居まらない自分に気付いていた。

彼女は安い貸家を見つけると、長い向住みなれた弟夫婦の母れを引越した。

一人ぼっちの淋しい引越しであつた。

嫌いで、くで居らない宍子の気持を察したのか、それとも猫は巨匠家にすみつくだけのためか、長い向宍子の手もとで暮らして来た猫は、引越す宍子の後について来ようとしなかつた。宍子は本当に一人ぼっちになつてしまった。しかし宍子は一人ぼっちの生活の中で初めていらいらしいこいを見つけた。ようで心安らかであつた。

彼女は、猫を好きも嫌いもない状態を飼いつづけてきた。

彼女は、娘や息子を、ただ生れ出た自分の子として、愛し続けて来た。

こうしよう、あ、しようという計画性も意志もなかつた。ただ彼女は、ひろって来た子供の意志に従って猫を飼わせたい。たててる父母や兄弟の意志に従って結婚し、子供を生んで来たのである。

競争という氣任いじみた社会の大きな意志の中で夫をもぎとられ、それによって自分自身もまたもみくちくにされながら、たどひたすら大きな奔流の中を小さく流れて流れて来たのである。

そして初めていこいを見付け出したのは、一人ぼつちの淋しさの中であった。

彼女はもう流されるのは真平位と思つた。どんなささいな流れの中にもはまり込みたくない。それは切実な願ひであった。そんな時、家出同然に出て行った末娘が一人の幸福な妻となつて帰つて来た。

幸福そうに娘を見るのは、やはり充子にも喜ぶのであった。しかしもう二度と再び、充子の心を濁流の中に投げ込んでもらいたくない。彼女はそうした警戒心を持って、娘を迎えた。人妻になつた娘には、以前ほどの満ち足りられなかつた。娘もまた優しさと思えるほどの心盡い気持ちをもつて、充子に接しているようであった。

しかし、娘は夫のもとに帰るまぎわ、やはり充子の心を見まごさすにはおかないものを残して行ったのである。

それは一ひきの子猫であった。

雨に濡れ、泥まみれに打つてふるえていた子猫をみかねてひろつてきた末娘は、これを私と思つて可愛がってくれ、と勝手なことを云つて、遠い嫁ぎ先へ帰って行ったのだ。充子はそれを一ヶ月ほど手もとにおいた。

しかし十数年かかつて嫌になつた猫を、どうしても再び飼う氣になれなかつた。

もう真平位。自分の意志に反してまで、娘に義理をつくすとはできない。

持つにはあまりにも遅すぎたけれども、やはり充子は自分の意志を大切にしていきたいと思つたのである。

志摩の旅愁

重川 雄

警島から船に乗った。

九月も半は過ぎると、船室の窓から吹き込んて来る風も、ようやく秋の氣配を持つている。潮の香りと、魚の匂いを合へた、それでいて、何か、うまいような風である。

海上に出て、見はるかす迎りは青い山のたたずまいだ——天張り内海だと云う証跡である。

一時間余り海を進むと、やがて、私は宿の表に來ていた。

伊勢系様を形式的にすませて、やっど、こゝまで来たと云う安堵感もあつて、玄関口に迎えてくれた二人の女中の顔さえさか見もせず

「お一人さまですかー」と、云う声に
「そうかー」と、軽く答へた丈で、私は、案内される部屋
に落着いた。

部屋は六畳程のものであったが、三畳程のベランダがかついて
りて、其処に、三畳セントが置いてある。其のテーブルセニタ
ーの柄がピカソ調なのを、面白いと思つた。

床の軸も、餘り高価なものとは思へないが、面画気分を盛
つて、近代的に、縁をよけい使つた山水の画であつたのも、場
所柄らしいし、置ままで取替へ向もない青々としたものであ
つたのは、好感が持てた。

楽しい気分で、私は、ベランダに出て、外の風景を眺めてい
ると、

「お風を吹いておられますかー」

と云う女中の声を聞いた。其の声には、何か記憶がありそ
うだが、思い出せない。

夕食をすませたが、まだ寝る時間でもないのに、私は敬介に
出た。

風が出て、岸辺に波が寄せて来る。残された白い花が苔台の
砂に、鮮かな痕を描いて行く。

私の感情は、こうした気分で、十分に慰められたと思つた。
かなりの時間を費やして、海辺から帰つて来ると、部屋へ、

女中が来て、床の用意を仕始めた。
「あなたは何と云つて呼ばはいいのですか？」

と、私をたずねた。

「秋ーと呼んで下さい」と云いながら、ちらと、私の顔を避

みて、小首をかしげている。其の態も、何処かで見たとや
る。

「秋さんですなー」とうなずいたが、私も何かしら不思議
なカに、魅せられる思いがして来るのだ。

「若しやー重川さんでしょうー」と云つたはずみに、秋
さんは、両手を頬に押し当て、――苦勞しましたッ――と、
呼ぶように云いのすす、フツ！と其の場へ泣き倒れた。

白い袴足が昔のままになおも女を止めていた。

二十餘年の歳月は、この人に何を与えて来たか、私はそれを
今度は真剣に聞いてやるべきだろう。

(二)

二十五年前の或る日の午台、私が校側で、猫と遊んでいると
彫下躯体腫瘍の巨め、夕暮になると、視力が減退して、屋根瓦
の一枚毎が、数えられなくなる。それを若し差支へなければら
遊び少々看病に来てくれなにかー」という書面を東京に居る
兄から受取つた。

東京は、修学旅行の団体で行つたきりで、個人的にはまだ
行ったことがなく、これは丁度好機会でもあったので、
行くことと返事をした。

着線池袋駅の近くに師範学校があつて、其の界隈の一寸した
空地に、五、六軒が、籬を距て、並んでいる。その一番東端が
兄の家であつた。回向程あつて、外に三畳の女中部屋が一、
其処には、秋田県から来ている秋子という十七才の女中がいた
大学の内科で診察してもらつた、此の症状は、萬人に一人
位しぬない、珍らしい病氣であるため、現在の医学では、治療

に確信が持てないと、いうのである。そういわれると、一つの課長を勤めているのではあつたが、人間的弱点を露呈してこれば、神信心しか外に方法がないのだと、私に告げるのだ。

およそ私達兄弟は、感傷に覆れるより只人向で口を叩いた。

健康に任せて、二人共、テニス大会などには、益々に出場したものだ。ところが、人々に云われると、真に兄貴も忝つてゐるなと思ひ、私は、オ一印象として、これは危い、感じ取つた。

大凡一ヶ月程、私は、看病人兼話相手という立場で、其の家で暮した。毎朝、石夫婦は、子供二人を乳母車にのせ、早朝から近所の、金光教々会に参詣するようになった。後は私と、秋子だけが残ることになる。秋田果出身だといふ秋子に、身の上話の一つも聞いてみる筈になつたのは、当然のことであつたろうと思ふ。両親には死亡し、兄夫婦の厄介になるのは、事情があつて心苦しいので、つい人の話に架つて、東京へ出てしまつたのだと云い、身寄りもなければ、口入屋に縋つて、漸く此処へ入れて貰つたので、此家が唯一の頼りです——と語る。其の左め、可哀想な女だと云うことが、頭の花に染み込んで離れられない。それから、何かと、私は秋子に話を付けてやることを、怠らなかつた。

時には——「あなただの奥妹は、大阪にいらつしやるんですかし。など、云い出すのだ、私は妻帯出来るよりは身分ではなかつた。まづ、勉強しなければならぬ。こんな急所を突かれると、私は慌て、

「無茶云うぢや——」と答える女だつたが、相手には、それで充分私の「人向」が解つていたようである。兄夫婦は内緒

で、私から小遣いも補助してやつたので、彼女は、家の買物などに出る毎に、モツと、自分の身の廻りも整えて行くようになった。

兄の病氣は、東京では治療の見込がなないと定まつた。田舎で静養して、自然療法を待つより外に手が無い。そうなれば、私共は、大阪の近郊の町である、自宅へ帰ることにはしなければならぬ。勤め先は一応休職とし、話が決まれば、其の用意だ。これは主に私がやつた。

いよいよ明朝東京駅を発つと云う処まで、万華手帳をすませた夜、皆が寝静つたとき、不図私は、女中部屋で秋子のすすり泣く声をきいた。はじめて、私は、モツと、秋子の部屋へ行つてみた。彼女は、寢床に俯伏して、泣いてゐるのだ。

「どうしたんやね？」と、私は小声で言つた。秋子は顔を上げて、私を睨つてみれば、何も言はない。根柢ような、訴えるような顔だつた。

舌々とした唾を漣かせて、ぐんぐん攻めつけて来る女の目は、朗らかで明るい。けれども、そうではない此の目は、反つて恐ろしい力を内蔵してゐた。

「あなただも大阪へお帰りになるんですしよ」と、茲にいつた。

「そうだ——」と、答えるより手はない。

「——妻は、どうすればいいんですの——」

——そうだ、彼女の荷物は私が荷造りした。けれども、其の届け手が無い。これではいけないと構つた。兄の友人を二三人頭に思い浮べて、「任しておきな——」と、軽く彼女をなだめ

たけれど、それはいささか軽率であつたようだ。

厄達を、早朝大阪へ送り出してから、私は其の足で厄の勤め先である役所へ赴き、厄の友人に秋子の身柄を託してから、私は後を追つて、大阪へ向つた。

(三)

それから半月、私は大阪のK病院の一室で附添人の役目を続けていたが、或る朝、

「此処は何処だね——」と、患者がいき出した。そんなことは、本人が百も承知のK病院である筈だつた。

「K病院だよ」

「K病院で、何処だね々」

おや／＼これは変だぞ、私は思った。K病院とは、自分が希望して入院したのも忘れてゐる。

「大阪のK病院——」

「まだそんなところにしたのか、じやあもう一眠りしようか——」

そういつて、またぐたと眠りはじめた。

医学には、まるで知識のない私は、病人が眠つてさえおれば自然気分的に解放されることに匹るので、読書するには此の機会よりない、例によつて、また暫く解放されたぞ——という安堵感が来た、ところが、急に凶らんや、此の高軒は二人きりの兄弟として三十餘年未一緒に生きて来た生命の、訣別であつたと口、気が付かなくなつた。私はこの慶意を察しく聞きながら、読書にふけた。窓の外には木プラの葉がソヨ風にゆれている。巡迴の看護婦がフルスをとりて来たが、事務的に其の勤めを

終えると、何も言わず出て行つた。

其の後二、三回これを繰り返したが大、最後に医者が這つて来て脈を取つた。其のとき医者は、一寸小首を傾けて、私に言う。

「朝からずっと寝通しですか々」

「は、よく眠つております」

医者は暫く考へてゐるようぢ素振りをしたが、やがて

「これは普通の眠りではありませんよ、所謂昏睡というものです。注射を打つておきましょう——」

そういつて、看護婦に命じ、大腿に注射した。

「これで醒めればよいが、さびかたら、危険です」と云い殊すと、部屋を出た。

それから二、三回末診はあつたが、同じようは注射をするだけで、結果には、何の異状もない、只心地よさそうに軒だけがづづいていた。

夜の十二時まで、それはづづいた。

私も、二、三で漸く不安を感じはじめた。午前の時五分、その軒も次第に小さくなり、かき消すように絶えてしまつた。

「軒は止みましセが——」と、私は宿直の医者に知らせに行つた。私について、部屋に入つて来た医者は、素早く急ぎの左手を取つて、

「駄目です」と、簡単にいつた。

それを聞くと、私も流石にドキツノ、とした。

「矢張り駄目でしょうか々」

「そうです。朝眠られたときから、駄目だつたのです。只今まで自睡状態が続いた事で、意識は、すでに失われていました。

「何かの手段はないでしょうか？」

「万幸つくしてしまいましたよ」

そうと決まれば、病院は簡単なものだ。死ぬに意図ではない、一つの物体だ。看護婦が入り乱れて、地下室の死体收容所へ入れてしまう。其の軽快な動作には、横々呆然と眺めている私でさへ—— なる程鮮やかだ。と、思われる程、組立られたものだった有無を唱える餘地はない。

私は、死体の後について、地下室へ降りた。一夜中、ここでお通夜するのだ、外に生きたものは、誰もいない、死体と二人きりだ。時々ビク／＼と、死体が動くような錯覚を感じる。この一夜は長かった、森雨とした病院の地下室で死体を見つめて待つている私を、私自身のもう一つの私が憐れむように見降しているような気持ちも湧く。

やがて遠響のような音を聞いた。どうやら市電が通りはじめ巨林である。階上で人の歩く音もはじまった。次々に朝の気配が感じられる。私は漸く、叔わかれて行く林な気になった。其の時、急に扉が開いて、私を驚かしたのは、思いもよらぬ秋子であった。

「ヤッ!! どうして——」と、思わずいった。嬉しいような憂もしいような、こんなに彼女を感動的に迎へ、見たことは、一度もない。

「危篤だと聞いて、昨夜東京を発ちました」
心細い一人通夜で、充分いためつけられていた私には、これまでの「女中秋子」がまるで天使のように見えた。

(四)

己の友人に、軽く其の身柄を托して、華定れりとした私の行急が果して彼女に惹き寄せたものであったかどうか。私自身一度深く、人間として、秋子の身辺を考へ直してやるべきであった所詮は男と女で出来上っている人間社会に於て、岳物の位置を置き換えたような方法で、彼女を処理し終えたかと考へたのはこれこそ大きな誤謬でわなかつたか。そんな気持ちで常に泣きながら、幾年かを私日送りにしていた。

従妹同志

(四)

室塚市 山 口 絃 子

友子はルリ子に無頓着になるようになった。と共に、彼女は誰に対しても無頓着になつていつたのである。それは長い前、友子自身気が付かなくなつたが、六年に進級して、いよく普通の小学校に通わずにとが、透にとつてマイナスにこそだけプラスにすることは一つもないことをさとつた両親が、彼を家の中に引きこめておこうと決心した時、その徴候が表わられていた。友子は、六年のクラス変えの時、かつて三年向共に親しんだ透の姿が彼女の側に見えなくなつた時、彼女は一瞬間の悲しさも、淋しさも覚えることなく、その事実を黙認したのである。

彼のことはその日から忘れ去ることができた。そしてルリ子と高子と同じクラスにはつた友子は、またあらに二人と親交を結ぶことになつたのである。

六年生は最上級生である。そして彼らにも各々のクラブに入

つて、責任ある仕事を命じられる。校内銀行とか、売店、放送係とかそういうたぐいである。ルリ子と柏木のルリ子は他の数人の男生徒と共に放送係に任命された。高子と友子は売店係である。他の生徒も各々の部所につかされた。

村上薫は新聞部に入って活躍していた。売店の仕事は朝と昼が忙しかつた。しかし放送後結構ノートや鉛筆や消しゴムを求め生徒がたごなかつた。

売店と放送室とは背中合わせに打っている。昼の時間や、放送後、暇を盗んでは、お互いにしゃべったり、はしゃいだりした。朝、人より三十分早く登校するのも苦痛ではなかつた。

のり子とルリ子、高子と友子、四人になつたクループは、以前のように喧嘩をすることもなくなつた。友子の心は無預着も現つて、平靜は、いや楽しさに浮きくとした毎日の中で、しむいになごんでいったのである。

また優等生行列の中に現じりはじめていたルリ子は、高子との交際よりも、より多くのルリ子や、彼女が作っているグループの人々と親しくなりはじめていたから、高子は自然と友子と仲良くなるより他になつたのである。

友子は学校では高子となじみ、家に帰ってからは薫の歌を一層ひんぱんに訪れるようになった。

というのは、五年生の終わりに近く、母が勤め始めていたから戻つた病院の院長の保障で、再発する恐れがなくなつた体をピンを張つて、五十を過ぎた母はいさんで、病院の炊事係になつた。

最初の一月、あまりにも激しい労働に、肉体労働をしたマ

どのない母は、息もたえだえになつて帰つて来た。そして何度か何度か退めよう／＼とつぶやきながら、一月月を過ぎたのである。不思議なもので、一月月を過ぎた時、母はそれほど疲れて帰らなくなつた、どうにかこうにか慣れることができたのだ。

そして再び彼女はファイトを燃やし始めた。

子供のためだ、子供のためだ！

それを心の支えにして……。

実際、彼女がもらつて来た初めての給料は、友子を、その元を何よりも喜ばし、何よりもめずらしがらせた。それまで友子は、数枚の千円札を一箱ににぎつたことになつたからだ。

それまで友子は母がどのくらいに生活費で自分達を養つてきたか知らなかつた。友子の知っていたのは、毎朝朝から夜遅くまで三シンに向つていた母の姿であり、食卓にのる命しい食物だけであつた。そして何をねだつても、その望みをはたしてもらへる見込みがないという事実だけだつた。しかし、三シン仕事をすする母は、暇をみつけては友子にいろいろ物を作つてくれた。真新しい大きな人形を抱くルリ子を見て、母は黙つて友子に手製の人形を作つてくれた。それは髪も手も足もない人形ではあつたが、真っ白な布に器用に眉や目を描いて、お母さん人形と、子供の人形を作り、本物そっくりの小さな上下の布団を作つて与えてくれた。それは友子が十二分に満足できるものであつた。

真白なレースのワンピースを着て喜んでいるルリ子を見ると母はそつと古い洋服をどきどきして、友子にピッタリあうも

のを作つて、それにアップリクをつけたりした。友子はルリ子の側にひっそり隠れるようにして、それでもそのぬい直された洋服に満足したものである。

友子は、そうした母の心遣いで、物質的な貧乏の苦痛を、三日月に感じることもなく過した。しかしそれは、友子が決してルリ子に先んじたいという望みを持つとはしなかつたからにすぎなかつたからである。

友子は決してルリ子に勝ちたいと思つたことはなかつた。何ごとにつけても……。ただ彼女は、ルリ子から視線をこらさうとばかり考えていたのかもしれない。

生れながらの、どうにもできない不合理な、不平等な運命。その嫌なものからできるだけ目をそらしていたのかもしれない。あきらめきれぬはまたなんと視線をこらさうとする着に大きな助けを与之てくれるものだろう。

友子は母がかぶせてくれる。あきらめというヴェールを顔からすつぱりかぶり、そしてそのヴェールの影からひっそりとルリ子にたまらない羨望の視線を投げかけていたのである。しかしそのヴェールの底に光る瞳は、陰気な、正視に堪えないほどの陰気な暗い憎悪の炎を燃やしていた。

友子はそのヴェールをはぎとる方法を知らない。そのヴェールをはぎ取り、その憎悪の炎を白日のもとに、あからさまにさらけだし、そしてそこから新しい道、新しい考え方、違った見方を養ふことができることに、友子は氣付きもしなかつた。また彼女にぞうした生き方を教えてくれる者もいなくなつた。ヴェールの下に燃える蛇のような執念深い憎悪の炎が、自分の心

の奥底深くひそんでいることに、幼い友子はまだ氣づくことのできないで、ただルリ子の影になつて、おどくど暮していただのである。

友子は表面はききわけのよい、優しい子であつた。鋭いものも母の一言を素直にあきらめるのである。

「家は、ルリちゃんとは違ふのよ、わかるでしょう？」
そういわれれば、友子はすぐおとなしくなつて、二度とねだらうとしなかつた。

しかし母にとつては、そのききわけの良さは身をきられるほど切ないものでもある。彼女はその不びんさから、友子を溺愛した。物質的な貧乏さを、精神的なものまでカバーしようとした。彼女はできるだけ友子を甘やかし、自分の手ではなげなげな曲のことは何でもかかえてやうとした。できる限りルリ子と同じように、糖一杯ルリ子に近づけよう。

母は子にお金のことば話さなかつた。まだ話さうにも話さうななかつたのである。

裁断のできない母は、ある小さな洋服屋から、裁断された布を、指示された通りに縫うだけであつた。それから得られる奉給はほんのささいなものだつた。朝から夜更けまで縫い続けても、ようやく一日のおかず代になる程度であつた。だからまとまつたお金、千円札を手取るのは本当に初めてといつていいくらいなのだ。

彼女は一カ月の後の肉休労働のほめて三枚の千円札をしまじみと見つめた。そして驚ろきの目を眺める子時と共に、喜びを味わつた。それは明日からのつらい労働への新しいエネルギー

左わきにさせる貴重な毒二びであつた。

そうして働きに出母じめた母は、朝早く、友子がまだ眠っている暗いうちから起き出して、病院に通つた。

それまで友子は毎日母の待つ部屋に居るやうに帰つてゐた。仕事に疲れた母を見るのは淋しかったけれども、仕事に追われて倒れるやうにミシンにしがみついている母の、生活に追われただけの姿をみるのはつらかつたけれども、それでも、学校から帰る友子を、母は優しく待つていてくれた。それは柔しい声でもあつた。暮る時と、御飯時にしか帰つて来ない兄は、母と友子の深い時間に向何の役目も果さないまま、友子は一人ゆつくりと母の愛を独占してゐたのである。

しかし勤め始めた母は、友子の帰りを待つてはくれなかつた。それは淋しい日々であつた。しかしあきらめることに慣れた友子は、またたく間に母のいない生活に慣れていつた。いや慣れたのではない。逃げたのである。彼女は母のいない部屋にカバンを置くと、急いで蕙の家に行く。時には学校帰りの途中、そのまゝ蕙の家に行くこともあつた。遅く帰つた友子を心配する者は誰もいなかった。友子はただひたすら、母の帰宅するまでの空白な時間を、蕙の温い愛をかいまみて過した。蕙は米屋の娘であつた。うす汚れた店のガラス戸には、うぶ人あります、と張り紙があつた。そして店の中には米を精白する大きな機械が、デーンと店半分を占領し、俵が山積されてゐた。後の半分には、色々の値段の米が、大きな箱のしきりの中に、店の暗さを反映して薄暗い白さが並んでゐた。

友子は時々それを横目でならんでは羨ましく思つた。店には

こんな米がある。しかし、友子の口にするのはたいてい蕙はんで、たまに白い飯になつたと思つと、きまつて外米が入つてゐるからである。

店の奥、台所の側にすぐ階段があつて、下駄を脱ぐとそのまま、蕙の部屋にドン／＼と昇つてゆくのが常であつた。店にはたいてい蕙の父が、ニコ／＼と優しい目をして、上着もスポンも真っ白になつた上だ、これまた粉で真っ白になつた大きな工プロンの下で手を組んで、友子の挨拶に答えてくれた。店の焼手の、さらに大きな屋根の下には、うぶなソーマンを作る機械がぎれいた並べて置いてあり、その向を二、三人の若い男がこれまた頭から真っ白になつて、忙しく立ち働いてゐた。蕙の母も、蕙の声をききつけて、台所から工プロンの赤で手をきき／＼とてきで、友子を優しく迎えてくれた。

蕙の家は居心地のよい所であつた。友くさんの本や人形を持つてゐる蕙は、おし氣もなかつた友子にそれ等を貸して与えてくれては、人の好きさうな頼をほころびしてニコ／＼してゐた。友子はその好意に、何のちゆうちよもな甘えることまでできて、それがまるで二人の共同のもののように扱つた。そうすることを蕙は当然のやうに思つてゐるかのやうであつた。

蕙の部屋からは、雑多な庭を見おろすことができた。そこにはソーメンのスタレたれさたり、シーツのやうなねり粉が、白されてゐたこともある。しかしたいていは、精白された米粒のからでいつたものであつた。

特に秋のとり入れをすぎると、蕙の家の庭には、もみからがうす／＼と盛られて、丁度北国の雪のやうに、二階の窓まで覆

ものである。そんな時、二人は意やくを罷ひ越え、屋根を伝つて、そのもみ火らの山めかけて飛んだ。もみ火らは服にあたりはテク／＼と痛いけれども、フアツと背中から落ちてゆく、まるで雪のペルトにねぞべつたやうで大層快いものであった。二人はその快さに身体中をぶっつけあって、夕方暗くなるまで笑い興じた。

本の紹介

学年新聞「大地」

室 塚 市 藤 本 洋 子

「教育のことを考えるようになって」

今年の変更、仁川小学校のある学童の母親から、こんなことを聞きました。

「学校にプールがないので、つい禁止区域の川や池で遊ぶもんだから、学校では愛護部のお母さんたちが交番でパトロールすることにいたしました。」

と二ろが、このパトロールの結果、

- 他市の学童とラッソをつく子どもが来てきた。
- 遠くからパトロールを見つけて逃げ出す子どもがあった。
- パトロール中留守をさいわい自分の子どもが川で遊んでいた、算々の向題がでてきたそうです。

私は、本当に子供を危険から守るといふこととはどういふことかを考えてみました。

去年は仁川小学校にもプールがでけるといふことだし、海へ連れて行ってはどうだろうか？でも汚染された阪神間の海は今年から海水浴場を閉鎖しました。危険だから、あれもするは二れもやるは、と禁じるからには何かそれにかわる楽しみを講べる二ことだ、本当に子どもを守ることではないだろうか。そして、パトロールをしてはお母さんや、近所の子どもをもつお母さんたちの話し合いがはじまりました。

子どももお父さんもお母さんも、みんなで楽しめることを何がやりましょう。というのが、みんなの一致した意見でした。そこで「バーベキュー・花火大会」を持つことにいたしました。回京族十五人が野外で親しく話し合いました。お父さんたちは、こさやかひビールに職場の話、景気の話、学生時代の思い出、プロ野球のことなど、なご、通りすかりに頭をベコリとさびるだけの無愛想に思えた人とはおよそ違つ印象を座をたぎわしてました。お母さんたちもまた、安心会話をたらくべべられたことの善さびを今ち合い、物柄のこと、子どもものしつけや教育のこと、衣類のこと、料理のこと、とめどありません。そして主役である子どもたちは、黙々とただひたすら食べ飲み、みんが着腹すると、お化けごっこに突っ込みました。いっめきあつて、いよ／＼大づめの花火大会にうつりました。いっも家庭でする四倍の量の花火は、それ／＼の光の模様を断に之がいては消えていききました。「さよなら」「ゲッバイ」別れたい別れのことばが、聲度もいくどもくり返されて大会は終りました。

また学令前の子どもの母親である私が子どもの教育について

真剣に考えるようになったのはこれからです。機会あるたびに
 学校教育という未知の分野の現状を知ろうとつとめました。そ
 して素晴らしい本を手に入れることができました。

それは、学年新聞「大地」です。和歌山の御坊小学校、五年
 の七組が、子ども父母、先生方一体になって、「大地」という
 学年新聞を通して、今日の日本の教育を本当に思つめ、向題を
 を引き出し合い、それをのり切るために向違つた教育をかへて
 いく力を生み出し、みんなが支え合つて、生き生きと活動して
 いる新しい厂文です。

「授業あつて教育なし」ということを直面するなかで、こ
 れ程、励まされ、教えられる記録を、私は今まで見たことがあ
 りません。中でも考えさせられたのは、五年生年令でない十
 才の子どもたちを、先生たちが、本当に信頼して、共に考え、
 話し合い力を合わせて行動していったということです。

「花火大会」もそれはそれで良かったけれど、その後毎月や
 っている「集ろう会」も、もつと子供を信頼し、子どもたちに
 手伝ってもらつて、より一層楽しいものにしていこうと思つて
 います。「集ろう会」で話し合われた向題が、学童の母親を
 通じて先生たちとの話し合いにまで深められれば、子どもを守
 る運動の芽が、きつと願を出し、はぐくまれるにちがいないと
 いう確信に満ちています。

みなさんに、是非一読をおすすめしたい「大地」、教育労働
 者である先生がたには、ご講読いただけたい「大地」です。

学年新聞「大地」

日本の教育をかえる

御坊の子供とPTA

和歌山県御坊小学校 P T A
 日本模範献協会
 共同編集
 定価 三三〇円

「大地」のなかから

父母会はこうあつてほしい子供たちのアンケート
 ○父母会の時こどもがまちあつてもわらわらないでほしい。私た
 ちはいっしょけんめいやつてゐるのだから。
 ○弟の口うが勉強がえらいので、父母会は弟の口うは
 かり行つてゐる。

○先生はふつうの時、わるかつたらおこるけれど、父母会の時
 はおこらない。
 ○先生、成績のことは、べつたにいいわんとてほしい。

同封のハガキについて

新しい年を迎えて、わいふの会員の皆林も、色々な抱
 負や計画をお持ちのことと想います。

「一九六六年の抱負」

「今年ぜひやりえい事」

「今年の夢」

等その他なんでも、一、二行でも結構です
 十五日迄にお送り下さい。

「内職ばやりをどうみるか」

ついで

滋賀県 三矢 久子

「わいふ、二十五号の森田安代さまの文章を拜見いたしました。私の近所にもいろいろ内職の仕事が有ります。そしてこの仕事をしている主婦の、万々をしております。この内職が良いか、わるいかなその人、各人の立場によつてちがつて来ているようです。私は内職をしても家庭の平和が乱れなかつたら金銭的にもプラスになるのだからよいと思ひますが、結果的にみて、プラスになる家庭と、マイナスになる家庭とあるように思ひます。内職も、或る程度、家族の協力と理解がないと長づきしないと思ひます。主婦本来の家政を整へ子供の手付け力を入れ、主人に精一ぱい働いてもらうためには、わずかながりの余暇がありまして、やはりこの暇を家事のことに専念する時間に入れた方がよいのではなからうかと思ひます。でも私曰内職は「悪い」ども、いいません。「良い」どもいいません。その人自身の心がけ次第によるからです。

私の近所にある内職をしている家庭二つの例を取ってみますと、

Aさんの家は主人(サラリーマン)長男次男口、学業終え就職しています、三男は大学に在学、全く子供に手がかりませぬ契さんはミシンの内職に精を出しています。月七千円以上の収入です。家族も割に協力的で契さんのシヤマになるようにな

ともなく、五年も六年も内職をつづけています。

Aさんの家庭はプラスになっております。

次に

Bさんの家は中学生(二人)小学生(一人)主人(サラリーマン)。契さんはウールの着物(和裁)仕立。

主人は掃除の好きで人でキチヨウメンな方ですので、先日内職のことから夫婦ゲンカが始まるうとしたそうです。

理由は、期日(製岳の仕上げ)までにキチンと納めなくてはならず、朝から雑物に追われ一日中掃除も出来ず、御風呂も出来ず夕方にになりました、夕食がすんでも、お着をははずすと又すぐ仕事にかかりました。

夕食後によごれた食器が流し元にそのままおかれてありました。

夜十時ごろにひとり主人がみかねて流し台のよごれた食器を流したそうです。二人は日が三日程つづきまじたら、御主人は「内職」は止めてくれ、一日つとめて帰宅しても、お風呂のかけんをみたり、茶わん洗いをしたりこれではやりきれんわい」とブツブツ云ったそうです。Bさんの主人は最初から内職反対論者だったのです。

掃除も洗濯も行き届かず垂は木サくの髪をなでつける暇も惜しく目は充血しつかれた女房の姿……Bさんはやり切れなかつたのです。Bさんの契さんは子供が学用品や教材を買つてやり度くて内職を始めたのです。

生活費の巨額ではないのですが、少しでも豊かな生活をのぞく人だわけですが家庭の空気が味気なくなり、料理もインスタ下

かかんずめとか簡単な副食になり勝ち、主婦の心ずくしの手向
のかげに料理はたべられなくなりました。

主人にとりまして一日つとめて帰宅して、うるおいのない家
庭ほどつまらないものはないでしょう。内職も各人それくくの
家庭に、プラスにやるようになったらおすすめします。

そして子供たちにつきかり手がかかからなくなったら余暇を生か
して、又自分の趣味も生きる方向に持つて行くようにしたらど
うでしょう。私自身家事の時間の使い方が下手なのが、何かな
かまとまった時間がなくて主人や子供たちの世話をしてい
るとアツチからもコツチからも仕事が出て来ます。家庭の仕事
は、元来うも出来ないが、又精を出してたらいくらでも仕事はある
ものです。私も現在内職をつづけていく自信はありません。し
かし明日にでも家庭の事情がかわり、食べるお米の心配がいや
おうなしにかぶさつて来たら外に働き口もみつけに出ようし、
内職もやり出します。人間だから欲もありお金も沢山ほしいの
です。でも当分はまだ家の中で掃除、洗濯、炊事、と主婦業に
専心つもりです

「稲垣様に」

石井よし子

「家庭と仕事」の記事を拝見してせんえつですすが私として何
かを書かずにはいられなくなりました。今は職種をぬ
きにして家庭の主婦が外に出て働くということを考えたいと思

以上

います。私も子供が出来ると共働きでした。そして経済的独立
なくしては女性には解放されないというふうなえらそうなことを
考えていました。ですから友達に会っても共働きを奨励してい
ました。ですから友達はむしろ。自分にはじめて子どもが出
来なくて、いかなくてはならなくなってみると共働きなどといっ
て外に出て働くなどということは考えられなくなりました。ま
した。結婚当初から子どものことはよくわかっていたのですが
生れてはじめて自分の手で育て、いくうちに外に出て働くなど
ということは考えられなくなりました。勿論私はは
夫の収入があつたのでありますが、でも私は看護婦、助産婦とい
う職業は大好きでした。特に大病院の最もいそがしい手術室など
で働くことは最大の喜びでした。今でも出来ることならこの
職業をつづけていきたいと思つてます。でも私には子どもが生れ
ました。これからは子どもを大切に家庭の中で育てていかなく
てはなりません。職業と子どものことを考えると私はどんなに
自分の恥を愛していてもやはり子どもの方が大切です。

最近の青少年の犯罪の激増を考える時やはり天竺さとか農村の
出かせぎとかいう問題と多少なりとも関係があると感はないで
はいられないのです。「人格の形成は幼児期に決まる」と昔か
らいわれ多くの人たちがよく知っています。それなのに母親は
外で働くこととします。子どもが出来てからも外で働いている同
子どもは保育所などにあづけられて一日中の大半を母親と離れ
て暮します。人格形成過程の大事な幼児期に母親と別れて暮す
子ども達がその一生にどのような影響を受けるかは重大なこと
です。子どもが生まれたならば母親はいちおう恥を返さず幼児期

だけでも育児に専念するのがほんとうだと思えます。子どもが生まれてからも母親が家庭に帰れないという要因はあります。でもその要因が解決されるのはいつのことかしれません。でもそうした要望は家庭の中にあっても広く母親同志に呼びかけて出来る運動です。母親が育児に専念できるだけの生活保障とか出産育児の社会保障などが政策として出されると子どもが成長したならば母親が休ける再就職の機会を保障するとかいろいろあると思えます私達母親は共働きをすることはがり考えないで家庭の中で子どもを育てていきながらこうした運動を広めていく方がより重要なことと思われれます。私にはそれは赤ちゃんとんの時から人にあずけているお母さんの気持ち解りませんが、母親が病気であるとか母親がいなくなるとかいうのではなくです。それから母親が仇がなくて生活出来ないというのではなくとも子ども何故母親でない他の人にあずけようとするのでしょうか。

共働きの家庭ではきまっておばあちゃんおぢいちゃん近くの子どもずきの人それから最后是保育園です。おばあちゃんおぢいちゃん達はこれから余生をたのしませてあげたいと思えます。私達をいろいろ苦勞を重ねて大きく育ててくれたまたそのうち孫の世話迄させるのはどうかと思えます。私ならいやです。困った時には行って助けてあげるといふ位ならいいでしょうが大仕事を終ってこれから自分のやりたいことをやって余生をたのしく過していきたいと思っている矢先また子守りでは終生休むひまがないではありませんか。孫の世話をするのが好きで好きふといふおばあちゃんおぢいちゃんならいいのですが老人を

束縛するのは少しひどいと思えます。子どもずきの人にあずけるといふのもどういふことでしよう。保育園にしても朝の夕時から夕方6時迄あまりにも時間がながいと思えます。子どもは帰って夕食をすませて寝るだけです。母親と話したり遊んだりする時間がなくていいものじゃないか。こんなことを書くといふのはワイルドの会員の方全部に叱られそうですが私任せめて幼児期は母親が家庭にいて子どもと一緒に生活するのがほんとうだといいたいのです。

——日本のお母さんは母親の役目を完全に果していると思つて悪いところは目につかない赤ちゃんをおんぶしている姿など世界一美しい。理想的な育児といふものはお母さんの愛情だけ子どもはお母さんから愛され愛されているといふ感情を持ってぱりっぱに健康に育ち人を愛するようになる。また育児過剰といふことがいわれるがどこまでを。熱心すぎる。と規定するのは育児過剰が神経質な子どもにするといいきってしまふのは危険だ。

——できるだけ母乳を飲ませるのがよい母乳でなければならぬといはいわれないがトラの子はトラの乳をクジラの子がクジラの乳を飲むように赤ちゃんには母乳が自然だから。そして赤ちゃんに。愛されている。という感情を持たせるにはお母さんが抱いて母乳を与えるのが一番いい。

——神聖な子どもは単に母親の育児熱心さのためばかりではない。ラジオテレビの発達や自家用車の普及で子どもたちの身の回りの生活は非常に変化しうるさくなっている。これが子ども達を神聖質にしている一つの原因だ。それに加えてこうした

複雑な生活にお母さん方が知らず知らずのうちに巻きこまれてしまっていることだ。たとえテレビに夢中になったり車で出かけることが優先して子どもたちのことがあとになつて結局子どもたちはお母さんの関心の外におかれてしまっている。お母さんたちがテレビや車にあんまり時間をとられていて子どもは育児熱心のお母さんに扱われる以上に神聖質になる。

— まうオーにバランスのとれた栄養のある食物を与えることだ。子ども達の食べものに細心の注意を払うお母さんはその他のことでも子どもを関心の外へ置くようなことはしないだろう。それが一番大事なことだ。

つぎに生活が複雑になればなるほど赤ちゃんや幼児には静かな生活を与えるようにしなければならない。休息日にはうちにて静かに休息しなければならぬ。日曜日に車で遠出するなどということも持っているが郊外でいい空気を吸おうということはちょっとはいいことのように思うだろう。かほんとうに赤ちゃんや幼児のためを考えたものだろうか。

— 日本のお母さん方にのぞみたいことは
— 日本の学校はアメリカとちがってたいへんきびしくしつづけていると思う。お母さん方が子どもを愛し育児に熱意をもつて保護することはよいが家庭と学校のしつづきのきびしさに差がありすぎて日本の子ども達はよくそれに耐えていると思う。だからお母さん方は入学の二、三年前から学校へ入れる準備として子どもに責任感と自主性を持たせるよう訓練してほしいと思う。以上「育児」を語る小児科の権威ファンコニー博士リンデ博士

の記事です。毎日新聞にのつていた記事ですのでお読みになつた方もあると思います。でも私達日本人として母親として耳の痛いことばかり大いに反省してみなくてはならないと思います。警察庁の「少年非行」によると昭和三十九年度の少年犯罪(4才以下)は全刑法犯の32%を占め、主要刑法犯は42%つまり主要犯罪の約半分は少年による犯罪なのである。とくに注目されるのは凶悪犯罪に少年の占める割合がきわめて高く、強盗48%・放火46%・婦女暴行50%と半数近くまたはそれ以上を占めている。さらに重要なのは敗戦の混乱期に激増した一般犯罪は安定期に入るとともに減少しているにもかかわらずひとり少年犯罪だけは増加の一途をたどっているということですが、

ひろば

私の感想

アルゼンチン 金頭 様

美和子さん

貴女様はとても沖繩の人々のことを心配していらっしゃると思いますが、この國にどしどし移民(農業ではなく)してこられるのを御存知でしょうか？ 毎月日本船とオランダ船が入港する度沖繩の方の名が沢山ないことありません。内地の人は生活が安定しているから、移民なんかせぬし、アルゼンチンに渡航するなんて知れたもの、といわれればそれまでですが……

日本人会館と別に沖繩会館ももっていますし、私の知っている

限りの方々は豊かに暮らしていられます。

二、三年の内に、家から五分か十分で中ける所に、この人たちのチントリア（洗濯屋）が五軒も出来ました。例外も勿論ありませんが、内地の人は割に、のびる人の尻を引っぱらうとする向きがあるにくらべて、団結心が強く、呼び寄せ、二年位すると頼母子を作つてやり、店を持たせたりすると聞いています。弟に聞かないと、はつきりした数字があらわしません。沖繩に住んで、この人達のことを心配していらつしやる貴女にぬけ道がチャンとあるので安心していただきたいと思ひます。

先日、私達三人が、三年前に、大洋の仕事で亜細亞にきてる主人の前へ会社から呼んでもらひ、スラヅルまでは沢山の移民の人々が三等に居られて、サントスで全部下りてしまわれて、ホツとしてゐると、一人だけ沖繩の青年が残りました。

彼は叔父を頼つてきたとのことでしたが、五年向すつかり忘れていましたら、丁度、その着いた日に、たずねて来られて、もう独立して車も買ひ、ペオンも二人使つていますと、言葉少なく語つて帰られました。彼等の辛奉強さと、周囲の人の思いやりとに感心させられたことでした。内地の人は、最高の大学を出られても、つまらぬサギなんかして、放浪して歩いたりしている方がどんなに多いことぢやうか。

石井よし子さん

二十二号の「パパ・ママ」反対、私は大賛成。実は私、小さい時から父ちゃん母ちゃんと呼びなれていまして、大きくなり嫁に行くからもちあちゃんでは一寸きまりが悪いとは思ひましたが、急にオカアサンなんて云うのも何だか照れくさく、と

うとう今だに母をバアちゃんと呼ばせるようで、改める事が出来ませんでした。それで今、十七才と十五才の娘、息子にも小さいときからオトアサン、オカアサンと呼ばせて今に至つて在り五年、どうしても彼等はパパ、ママと云えず、近所のレオールも私の事をオカアサンなんて呼んだりしています。オカアサンというの私の名前かと思つてゐるのです。十三年目に今の二世の絃子が生れましたが、この子の名前はクラウデア・マリア・絃子というのですが、近所のある人はクラウデアと呼びもつ一人はマリアと呼び、家ではヒロコと呼んでいましたが、ヨチ／＼歩きの頃まではどの名を呼ばれても分つてニコ／＼してゐました。でも三つになつた今は近所中、ヒロ子／＼と呼んでくれます。この子もどうしてもママ・パパと呼ばない。家でみんな云わないからです。お母さんお父さんと呼ぶのです。実はこの團に住んで子供を持つてゐる人の全部のなやみそれは子供がともすれば日本語を忘れる事なんです。来年はこの子供も勿種園・これに入つてスペイン語ばかり使つていたら、と今から心配。今の所、半々に言葉を知つてはいますが、でも二人の上の子もケンカをする時は私に分らぬようにカステジャーノ（スペイン語）でやるし、末っ子も油断してるとこの團の言葉を使いたがるのです。お母さん分らんから二ホンゴでいいなさいと怒ると、しばらくふくれて黙つて、やつと古い替える始末。でも今の所私がサツパリこの團の言葉が分らず一人で日本語保護委員会の会長よといはつてゐる位ですから忘れるなんて事はマア／＼ないと思ひますが、次のようにならねばいいがと思つてゐます。

ゴッソ

「ヴァーン」

「アラ大変こぶがこんなに」

はい **ヒルドイド**

うちみ、くじきも大丈夫

ポキポキ

「あ、肩がこった」

「首がまわらないの」

はい **ヒルドイド**

朝になるとはっきり、すっきり

ガサガサ

「手があれて困るわ」

「あかぎれが痛いの」

はい **ヒルドイド**

なめらかな皮膚、ほれごりん

コンコン

「ママおのどが痛い」

「また扁桃腺ね」

はい **ヒルドイド**

軽いうち、早目にぬると効果的

その他 神経痛、乳腺炎、やけどや手術後のケロイドにも

ヒルドイド

ドイツ輸入医薬品

ヒルドイド

14日入 ￥500
40日入 ￥1300

輸入元 大阪市東区唐物町一 マル本株式会社

製造元 ルイトポルド製薬会社 ドイツ

(注)

- ◎ 使用量の多い程ききめが大きい、効果の少ない時はたっぷり塗って下さい。
- ◎ ただし、出血している所へは塗らないようにして下さい。
- ◎ 「ヒルドイド読本」を差し上げます。販業、年令明記の上輸入元へ。

(引頁よりつづく)

今でも何だかアクセントがおかしいのですが、ある夜、弟がダンズパーティーに行き美しい日系二世嬢のお相手になりました。二三回バイレ(ダンス)をしまる内に何うごまが話しかけて「アナタ、ワタシニ、トシ、イクソ、クレマスカ？」弟……トシ、イクソクレルカ、なんていう事、何かなあ……はあ、どの女の子もよく私いくつに見える？ってよく聞くから、そう云う事かな。「貴女は十八位位に見えます。」「アリガト、ワタシニ、アタタニ、ニ、ニ、アゲマシヨウ。」「ああ、ありがとう。僕は二十四です。」これ以来二世嬢は敬愛。

先月、日本から艦隊が訪迎した時、息子が軍艦見学に行き、いろ／＼船の事、質問したりしていたら、「あ、あんだ日本語出来るの。一寸書いてみて。あ、うまい／＼。漢字も書ける。フィン。ちよっとニンにいて通訳して下さいよ。」隊員さんにニウズわかれて僕はおかしくておかしくと家に帰ってゲラゲラ笑っていました。娘は演芸会があつた夜、気屋辺りで「オヤーあんだニホンゴうまいねえーこれ何ていふもの」「オタスキでしよう。」「あ、感心／＼。よく知ってるねえ。ふはこれは？」「スゲガサでしよう。」「ヘー＝人共二世に似てるのかしら。家に帰って大笑いした事をした。

パパ、ママからペンが横ずべりました。考えてもごらん下さい。小さい時は可愛いらしい呼び方も二じわのふえたオバサンやびげのはえたオッサンが、パパ、ママなんていつてごらん下さいよ。ゾーとするではありませんか。

溝端 富子 さん

二十一号の「きもの有備」すてきでした。二んね、いきせきさって走ってるみたいな世の中で、こんな気持ちでいる人はいらなう。突にうれいすね。五年間もお茶箱にしまっている。私の敬愛いきものも、貴女に会いたくて泣いてる事でしょう。

森 かなえ さん

貴女の息子さんもよくなんばつたとカンシンしています。がんばる様に力づけた、お母さんの貴女も本人以上に辛かったでしょう。母親の云いつけをよく守るお子さんには突にうれい気がします。この文章は娘や息子にも読ませなくてはと考えています。

若 田 元 子 さん

よく御世話なさいましたねえ。さあかし老人ホームにおねがいするまゝは御主人にも気がねをなさって辛い日々だった事でしょう。

老後に安定した生活をするためには社会保障が大切です。でもいくら文化画家であつて、社会保障がちゃんとしてあるだけでも、それを運送する人にも向味がなければ何にもなりません。貴女に冷たい態度で接した民生安定所の人々もそれです。彼等は余り深山の例をみているし、暖い思いやりがなくなつてしまつてゐるのです。いわゆる役人根性、ある流行作家が前に書いた首相への公函文があつたようにしても、何の解決も得られなかつたでしょう。貴女が厚生大臣に手紙をさし上げたとしても途中でにぎりつぶされるか、方一手許に書いても下の方に行くまゝにうやむやになつてしまいます。人間とはつく／＼かなし

いものだと慰めます。人間味をなくした彼等を腹立てたりあわれむより先に、實文のお子さんややさしい心で伯父様にいたわって上げた事を喜ぶ事にしようではありませんか。私も此頃ではもうあきらめる事にしました。

実は弟も未垂しましてすぐ家で眠があるまでぶら／＼してゐるより、S氏の事務所で遊ばしてもらった方が言葉も早く覚えるだろう、彼は夫人が二の國の人だからと主人もいいますので、毎日そこに通っていました。彼は昔々、アルゼンチンのロックフェラーだと云われた様に貿易では腕があり、現在成功してゐる方は殆んど商売の仕方を知つたといわれてゐる人ですが、戦争中未明にベントから收容所に入れられ、戦后出てきた時は、もう彼の世ではなく、收容所内で体もいため、一人の子息も満足な体ではなかつたといつたわさ。夫人は心痛で弱り、ある人の世話で事務所の一室をかりつけ、そこで旅行社とパスポートの世話、恩給を受けてゐる人の御世話等を仕事にして、古く大きなホテルタメント（アパート）の一室を借り受けて暮して居られました。夫人を亡くされた後は想い出の残る室内を見るのも辛いと帰らぬ時が度々で、その内夫人の弟夫婦がチョコ／＼生活費をもらいに来たのを弟は見き、していたまうです。（外人は女の嫁ぎ先に頼りたがる）

秋ヶ月するうち弟に暇がきまり、止めさせるからと主人がアイサンに行くつと、頼むからこの仕事を手伝つてくれ、今度の仕事でどれ大収入があるかれないが、先になるとこの方な数倍も本人のためになるし、今この人をお自分から救さないでくれと泣くように頼むので、老人には猶ほ主人は、まあ／＼しはらく

様子を見ようと怒る私をなだめました。

真面目に仿いていけば老人になつても恩給は充分（？）とれ、ゆつくり暮せるこの國でも、その代り給料から引かれるのが大変。言葉も分らぬし、長年の外國暮らしでどうにもならず、年をとつて、S氏の事務所に泣きついてゐる／＼の面倒な手廻き左とリ、とれるようにして上げたり、隣の國のパラグワイから逃げてきてもセドラ（身分証明書）がなければ勿く事も出来ぬ方を苦勞してセドラをとれるようにして上げたり。戦前の全盛時代は小使の支度々もらつた人も教えきれぬ程深山あつたまうですが、いよく足腰を自由に出来ぬようになり、厄介になつてゐた日本人の花屋さんからも遠い出され、やむなく、私の家まで来ようとして道路を立往生した所を近所の青年に連れてきてもらい、来て向もない弟は日本人会にもかけ合つて、やつとオスピタール（慈善病院）に入院させる事が出来、ホツとしたのも束の間、夜中にヴェエノスも街はずれの公園に放り出されてしまいました。口もろく／＼きけぬようになつてゐる体をやつと逆りに居られた日本人の洗濯屋さんに公園で遊んでいた少年が知らせて運び、電話をかけた弟が飛んで行つてみると病院では余りのなれ流しに黙つて放り出したらしい。

（これを正面きつて文句を云えば係りの人の首切りは勿論、医者も責任をとられるのはこの國として当然ですが、どういつか陰でスツ／＼いつてもどうにも出来ぬ許りか、老人ホームに入れるまで一晩だけ泊めて上げてくれないかと日本人会に頼んだが断られた。弟が泊り込んでたれ流しの世話をするつと頼んだがやっぱりだめ。（あとで管理人のこの態度が向題になり、

彼は止めた。家につれて帰るうにもベントのあいたの日はなし、ホテルは斬られる、進退きわまって頭をか、え込んだ弟をみて私は何かに向つて胸がフク／＼して、いてもたっても居れなかつた。どうにも出来ず、主人は出航中だし、近所のホテルに泊めて、一時間待たすによされるシーツ、衣服をホテルに分らぬようにとり返えとり替え、と／＼一廻回、ろく／＼眠れずだん／＼ホテルがどつていく弟をみる私の気持。日本の母からは可愛想な人の御世話はよくして上げなさい、廻りまわつて我が身にくるからと云つてくるし、私はこの人によくして上げたら日本にいる父が又い、目をみるかもしれぬからと力づけるものの、本人よりやつれて行く弟の姿はみるも痛ましく辛かつた。三度の食事を運ばせる娘と息子は部屋がくさくてもいやな顔をせず、「お母さん今日ね、昼食もつていつたら小用なので、かかえてもつて上げたら私の手に小用かかつたのよ。」とゲラゲラ笑っている、娘によくしてあげたね、かかつたお前の手にゴヤシがよくきいて器用になる事だろうよと穴談にしていつてはいたが……、たま／＼お子をおみにきた一人の日本人、昔々小使いをよくもらつていましたよという方が一キシのパンさえもつてきて上げようとせぬ計りか、奥さん今日は何をたぐせましたか？余りの貧向にハアアといつたきり返事も出来なかつた。野良猫がまよいこんできたつて何かたぐせものをたぐせせない人がいるだろうか。ゴタ／＼してる内にやつと養老院に入れる事になり、小ざ／＼ぼりした服を着せたS氏をささえた弟が院に入るうとしたら、采れる事には、入口にはズラリと教名の役員へ日本人会へが並んでいたとか。中では辛い御世話をする人が

牧師さんなのでよく世話をして頂いたらしく、意識のうすれたS氏の口から出るのは弟を息子と感ちがいはしてらしくミイイ木私の息子／＼と叫んでばかりいて、息をひきとるまで貴方の事ばかりいつていましたとつきそいの修道士にいわれ涙をながしてました。

困り果てたとき借用証のある人に催促しようとか、奉賛帳を廻そうかといつていた弟も日本にいる妹さんに日本にお帰ししたらと相談してもとおまわりで断つてきた事を思えばまして他人は当てにはならず、病氣でたおれたと新聞に出ても音沙汰もない人では返してももらえず、奉賛帳は本人がフライドの高い人守のふ本意ではあるまいとすべてあきらめました。亡くなつたあと馬小屋から放り出した人が四十九日をするといふについてはあきれもものもいえず、まるで茶番劇を見るようにさえ思いました。

昭和のニケタ生れ、高校時代は教師も余りの悪童ぶりにサジをなげ、こちらに渡つてくるとき、主人に母から何れも迷惑がかかつてもしりませんと手紙でいつてこられた弟、彼がとくべついい事をしてる訳でもないのに、人間として当り前の事、誰がこんな目にめぐり合つたとしてもする事でしょうが……。社会保障があるいい国に住んでいても運営する人がチャンとしていなければだめという事。それこそ直路にほつり出してれば善業が連れて行き、す早く事は運んだでしょうが。それこそ教ヶ月事務所にいた許りにこんな事しなくてはならないとはまるぞワザ／＼日本からSさんの御世話をするためにアルゼンチンに渡つてきたよつね。でも世の中うまく出来てる、いくら

住みにくいといつても、お金持でも納屋さへ貸さぬ人もいるかと思えば、居候でもかけずり廻って世話をする。精も根もつき果てたときにひまっこりお前のようなお人よしが現れてどうにかして上げるなんぞ世の中に絶望する事ないねえとこの頃よく誂すのです。

学生時代はナンバ・コーハイずれも親分で、母はよく先生からきた手紙をみて泣いたりしてました。よく食事の時、療時代のいたずらを笑って話す叔父の顔をつくつくみて息子が申します。「呆れたね。その時の人と今の人とが同じ人だとは」。S氏の歿したたった一つのタイプライターだけを資本に、オフィスもある人の好意で貸してもらい、小使い兼社長を一人でがんばり旅行社をやっている彼。将来はどうなるかまだよく未知数乍ら戦後の子供はどうの、青少年はどうのと悪口許りはいいえないとつくづく思います。どこへ行っても新米でドイツ人が合伴したらとすすめても断り、やれるままやれとけしかける主人の言葉を唯一の力で毎日働いてる彼。毎月の命日にはかかさず花を墓前に供え、二時向もかかる所に出かけては、Sさんは立派な人だった、教えられるものが沢山あったと語る弟を、一時間も病に苦しまず亡くなった父に守って必死で下さいと祈らずにはいられません。

二ちちから乗船切符を送ったとき「はじめさん(主人の名)はバカな奴だ」と一言つぶやいたという父はどれだけこの息子のために困りぬいていたかよく分ります。人向は廻りの状況がいくら変るといふ事。いくら辛に苦しむ世の中でも絶望することはいらないといふ事。とは云って、いつも不合理な世

の中にフリークって暮してはいますけれど……。

おたより

宝塚市 高木 由利子

出産のため、ゆかみぞ教室「保育所つくりの記録」は一回休ませていただきます。

十一月二十一日に女の双生児が生まれました。予定より四十日も早かった為、二人とも未熟児で、三週間目になる今日、まだ病院を育ってもらって居りますが、この頃はミルクもよくのんびり毎日のように50g、60gと体重もふえ二人とも順調に育っている様子です。

双児とは、生れるまで想像もしていなかったもので、どうしても育ていけばいいのだからと毎日心配しています。木下さんや水戸さんも双児のお母さまとうかがいましたが、御経験のおありの方に今後色々とお話ししていただきたく思っています。

高知市 山地 霜子

唐突にお手紙差し上げ恐縮に存じます。高松市上福岡町石井よし子様より御紹介を戴きまして、わいふの会員にお願い致したく存じます。

少しでも私なりに向上致したく、お仲間に入れて戴けます旅御取計い下さいませ。

神戸市 中 島 美智子

早速に、わいふにお送り下さいましてありがとうございます。御多忙中申し訳ございません。厚く御礼申し上げます。是非共読けて拝読させて頂いております。(中略)お友達や御近所の方に。お見せしようと思っております。わいふ編集の皆様、色々大変な事が山程おありの事と存じますが、ますます御発展されます様、お祈り申し上げます。

沖繩 大 城 資代子

わいふ。二三号、二四号昨日受けとり大変うれしく読ませていたゞいております。実は御存知のことと思ひますが久留米出身の後藤美和子様より貴誌をすすめられて送付していただきながら出産やその後の健康がおもわじくなかつたりしてお礼のお便りも今日まで失礼しておりましたこと深くおわび致します。私も沖繩に嫁いで満一年目を先日迎え、今親子三人でささやかな家庭を築いておりますが、沖繩では主人の方の親せき関係やお友達以外には知人が一人もいませんし、このわいふはとて興味深く読ませていたゞいてます。

私も短大時代は京都で過しましたので宝塚出身の友もいましたし、六甲山へも遊びに行つたこともありまして何だかとてもなつかしい地です。我々も七月に那ハ市に引越してきまして現在のアパート(個人)は四軒のみであまりつき合いもなく、今度から貴誌への仲間入りをさせて戴ける事を最大の楽しみにしています。残念ながら今月は今就取の為の受験勉強中で原稿が書けて居りませんので、来月あたりから投稿させていただきます。

いと思ひます。

尚簡単ながら、我家の紹介でもさせて戴きますので、どうぞよろしく。

夫は大城栄徳と申しまして、きつすいの沖繩出身の秀才、身長は、はっきりと私にも玄々てくれませんが所を見ると、私とほぼ同じか、少し高い位だろうと思ひますが、色はどちらの人としては、白い方ですが、本土の人と比べるとやや、浅黒くテッスリとしていて、最近下腹が益々どび出して困つています。ゴツとこんなタイプですが、午年生れのせいか物言がのんびりしてゐる代り、慎重型でオツチヨクヨクの私と性格は反対です。勤務先は政府の公務員ですが、その他に沖繩青年団協議会々長、祖国復帰協議会(俗に復帰協)の副会長いずれも二期目を兼ねてゐます故、連日連夜余り家にいる事もない多忙な人向です。私の方で才で卒業後郷土の山口県宇部市で病院栄養士三年、学校栄養士一年で、昨年十一月結婚し現在今年八月中旬、長男を出産した主婦です。たまく宇部にいる時、山口県連合青年団の副会長を数年やつていました関係上、彼との文際がはじまり、ゴールインした訳ですので、まだ新米の沖繩住民ですが、いろいろの向題点の多いこの地に住みついて考えさせられる所が多く、後藤さんの帰えされた後のこちらの様子でも書いてみたいと思ひますので、どうかよろしく仲間入りさせて下さい。皆様と御一緒に勉強したいと思ひます。

枚方市 川 中 重 雄

二五号拝受しました。今月は大丈夫がー何人推薦を見るぞ

とに幣にまじった気持が湧くのは私の悪い癖かも知れませんが、それ程早く過去に二つした経歴を踏んでおりますが、幸いにして、わいふに關する限りこのきつは水解して行くので、やや安堵の念を抱きはじめております。

それにしては、執筆されておる人々がよくもこれ文、歩調が揃うものだと感心しております。一寸自慢のようでも心苦しいのですが、私共毎月十枚や十五枚程度の作品なれば平氣でおりますけど家庭におられる御婦人方がこつとも連続して執筆されると云ふことは、大変な努力が必要であり、男子と違つて筆を執る機会がすくない苦なのになつとつくづく感心させられてまいります。

現在私の家庭は夫婦は娘一人。長女は結婚して枚方の香里団地におりますが、却々筆を持つことの嫌いな娘で又近所の人達と遊ぶこと位いの用事しかしていませんので、比較するのは失礼ですが余計に執筆の出来る人達を羨ましく感じてまいります。

松戸市 中 川 契 子

わいふのママ、パパの呼び方、あの記事はどうもいつももの記事のようにスラ／＼読めませんでした。そんなに取り上げて文章にするような問題は無いと思ひます。家では、はじめはママと呼んでおりましたが近所でお母ちゃんと呼ぶのが云々のので、この頃ボクは私の筆をお母ちゃんと呼んでおります。お母ちゃんでもママでも私は「ハイ」と返事を致します。

どちらでもその家々によって自然に自由にしたらいいもので

あつてこれだけが日本のいい物が失なわれていくといった重大な事ではないと思ひます。

もしもし 榎

斎藤さんへ

アルゼンチン 金 頭 榎

少しおそくなりましたが……お嬢さんは如何ですか。

パンに、バターと蜂蜜を同量小皿にとりよくよくねりあわせてぬつてあげたり、チーズを少々ずつ差上げたら如何ですか。

子供は業外、甘いものよりこの方が好きではないでしようか。家の子供が、あまり甘いものは好きではありませんの……。

ピサはとても子供好きなので、作り方を書きたいと思ひますが、娘の方がよく知っていますので、次に書きます。お大事に。

高槻市 吉 田 てる 子

お鍋の二げつきを手早くとる方法を教えて下さい。

かた茂でゴシ／＼やってみるのですがなかなかとれません。熱湯をかければすぐ二げつきもとれてきれいになる方法はありませんか。

△家庭▽

タジャリーナ(スパゲッティ)

アルゼンチン 金 頭 様

日本の方が御料理に、ミソ、ショージュが欠かせぬように、イタリヤ人はトマト・アホ(ニンニク)が絶対に必要。近所のセニョラは、トマトの一番安い頃になると、大さわぎし、トマトの織うめを作ります。缶詰は安く沢山売つてゐるのに、息子も手伝いに行つて、三本もらつて帰りますが、やっぱりお手製はおいしくてきれい。タネもきれいにのけてあるし。

この国の人はもう絶対と云つていゝ程、本曜と日曜日はタジャリーナを食べます。一週間に二回これを食べれば、疔病にならぬと彼等は信じこんでゐるらしい。この二日は沢山あるタジャリーナ屋は行列で、生ものを買ふ爲に、日曜も店を開けています。(その代り日曜日は休み) この日は主人の買物筈が多い。型も色もさまざま、赤い色、みどり、黄、白、太い、細い、チリチリちぢれたの、等、作り方は簡單です。

へさつき、イタリヤ人と書きましたが、この国はイタリヤ人がすく多い。前のフロンテイシ大統領は二世。今のイリア大統領もイタリヤ人の三世ですから、どれ位多いかわかりませんよ。

ピントははずれているかも知れませんが、私にはどうしても昔、日本が軍人先によつて滿州帝國を作らうとしてしくじりました。イタリヤは移民をドンドン送つて、カマーツマ、そ

れに近いものを作りあげてゐるよくな気がしてならないのです。作り方は(三人分)

「トマトかんずめ(日本ではピューレでしょうか、味がついてないもの)

料 肉一人100g (挽肉でもいいですが、一寸木っぽくなり
枚 ます。でも味は衰りません)

玉ねぎ250(中之個) ニンニク

まず野菜いためより。少し多くオリウ油を鍋に入れ、こまかくしたニンニクを、キツ木色になるまでいため、月桂樹の葉を二、三枚いため。(香りをつけるため、なくてもよい)玉ねぎをみじんにしてよくよくすきとおるまでいためます。どういうわけか、肉を先にいためたらまずい。肉を次に入れ、色がかわつてきたらトマトピューレを入れて、はじめ強火でさつと煮て、あとは弱火でゴトゴト。味つけは塩だけ。

スパゲッティは、干したものは塩湯で一度ゆで、召上る時、もう一度熱湯に通すと美味。召上る時はケッソ(ヘチーヌ)を、庶臣蔵のうち入りの時に降る雪の如く、ふりかけて召上れ。

のみものはコカコーラかジュースが合います。御飯よりアランスパン。彼等は右手にフォーク、左手にちぎったパンを持つて、フォークをフルクルまわしてパンでさくえ、口にもつてゆき、最後は皿に残ったタレをパンできれいにふいて食べてしまいます。

ニンニクは一人一かけら位入れますが、多いと臭いといわれる方は、冷い牛乳をのむとにほいも消えるといいますが、これは一寸あやしい。

味が物足らぬとか、肉の少い時は、塩を入れる前に固型スリープを入れたら味がよくなります。

○中島澄子さんの妹さんが結婚されて、石川瑠子さんになられ、新しく、わいふに入会なさいました。お住いは、大阪市住吉区沢の町一三三の二、松竹社宅内

○ぬかみそ教室に、BBS、左お書き下さった高橋紀子さんは、左記に住所変更なさいました。

室塚市川面東広沢六二、丁Eし宝塚⑦七二九五

○二宮友子さんも左記に住所変更なさいました。

兵庫県加古郡播磨町野添駅西

○神戸市の西尾典子さんが新しく入会なさいました。

編集後記

○わいふ二周年記念バザーは、皆様の御協力によって、予想外の成果をあげることができました。遠方から品物をお送り下さった方々には、厚くお礼申し上げます。なお、収益の会計報告は、別項でござらん下さい。

○かねて申請中のオ三種郵便物は、発行部数が足りないため、認可されませんでした。送料の赤字は、バザーの収益金で、補ぎなつていきたいと思ひます。

○ぬかみそ教室、保育所づくりの記録は、高木由利子さんが出版されましたので、今月はお休みにします。

○わいふの印刷をお願いしている希望の家が二十八日ご仕事おさめをするため、十三日で原稿を締切りしました。それ以後到着分は、来月にまわしますから、御了承下さい。

○今年もいよ／＼おしまいです。皆様、どうか良いお年をお迎え下さい。

ごそんじでしようか

神戸銀行の自動振替制度

公団家賃、NHKの受診料、電話料、ガス代、電気代など銀行の預金口座から期日には自動的に払い込める制度です。手続きはトテモ簡単です。

神戸銀行の窓口へハンコを持ってお申込みになれば無料です。くれます。お取引のないかたでもこの機会にお始めになれば毎月のお気づかいやお手向も省け何かとご便利のことと存じます。生活合理化のためにもぜひ皆様におすすすめしたい次第です。

○今月は草川、斉藤由、斉藤彌、鈴木、田和、高木、十日市、沢岡、八尋がお世話しました。

原稿・誌代の送り先

宝塚市鹿座高丸仁川西地10-205

高木由利子

電話西宮⑤二五〇一内線(三三六)

原稿×切日 毎月十五日(以降翌月まわし)

購読料 月八十円(送料含む、切手可)

印刷所 宝塚市安倉字垣添一五二

希望の家

昭和40年12月30日発行(毎月30日発行)

わ い ぶ 26号 定価80円

発行人 宝塚市鹿島仁川団地10-205

高 木 由 利 子